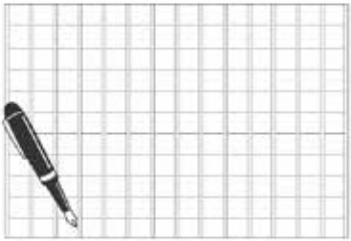
ふるさと秋田文学賞 10

受賞作品集

第10回ふるさと秋田文学賞　受賞作品集



刊行に当たって

本県は、全国の都道府県に先駆けて、平成二十二年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、平成二十六年には十一月一日を「県民読書の日」と定めました。

「ふるさと秋田文学賞」は、その記念事業として創設され、国内外の方々に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることを狙いとし、秋田の自然や文化、風土、人物などを題材として描いた作品の中から優秀なものに対して与えられる賞であります。

節目となる第十回を迎えた今年度は、国内外から過去最多であった昨年度に次ぐ百四十一編の御応募をいただきました。応募された皆様には心より感謝申し上げます。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の五類感染症への移行により、人々の往来が元の形に戻る中、県内各地への旅をテーマとした作品のほか、ふるさと秋田の歴史や生活を題材とした作品が数多く見られました。

読書は、著者の目から見た世界を読者が追体験し、そこから学ぶことができる貴重な財産であり、いつでも相談に乗ってくれる友人のようなものです。

今後も、県民の皆様が、日々の暮らしの中で読書に親しむ機会が増え、じっくりと活字に触れることにより、生涯にわたって心豊かな人生を送ることができますよう、読書活動の推進に全力で取り組んでまいりますので、よろしくお願いいたします。

結びに、創設以来「ふるさと秋田文学賞」の選考委員をお務めいただいた西木正明様の御逝去に際し、これまでの御尽力に深く感謝申し上げるとともに、謹んでお悔やみ申し上げます。

令和六年二月

秋田県観光文化スポーツ部長　石　黒　道　人

目　次

第10回ふるさと秋田文学賞　小説の部

◇ふるさと秋田文学賞
星空に、へばな　牧野恒紀・・・・・7
受賞者のことば

◇ふるさと秋田文学賞佳作
男鹿の花嫁　中村均・・・・・53
受賞者のことば

第10回ふるさと秋田文学賞　エッセイ・紀行文の部

◇ふるさと秋田文学賞
該当作なし

◇ふるさと秋田文学賞佳作
秋田美人は背中美人　榎木　由紀子・・・・95
受賞者のことば

■選評
生ま身の人間を描いて　内館牧子・・・・112
最後の仕上げを　塩野米松・・・・116
切なさあり、ユーモアあり　橋本五郎・・・・120
■一次選考委員寄稿
モノを書く人の読書　柴山芳隆・・・・124
□秋田県の読書活動推進施策・・・・129
□作品募集要項・実施状況・・・・137

第10回ふるさと秋田文学賞　小説の部

ふるさと秋田文学賞

星空に、へばな

牧野恒紀・作

星空に、へばな

「秋田にはよ、宇宙一ウマいうどんが食える場所があンだ」
プロレスラーだった父親の言葉を、何故かずっと憶えていた。
「行列のできる店とかじゃねえ。その場所ってのは……」
得意気な、それでいてどこか淋しそうだった横顔を、何故かずっと憶えていた。
今さら彼のことを何て呼べばいいのだろう。六歳で両親が離婚、その後の交流がなかった娘にとって、父親は曖昧な存在でしかない。
〝パパ〟は違う。〝父〟だと遠すぎる。〝オヤジ〟では暑苦しい。
おどにしてみよう。彼の故郷、秋田の呼び方だったはず。
つい先日、おどは人生のスリーカウントを喫していた。リングの上で、なんてかっこいい最期じゃなかった。同僚の車に相乗りして現場仕事に向かう途中、居眠り運転のトラックに突っ込まれたのだ。まだ四十八歳だった。
東京の葛飾で執り行われた葬儀には、妙にいかつい男ばかりが十数人、ずらりと顔を並べていた。下町プロレスというインディー団体の選手たちだ。
おどにレスラーとしての華はなく、商いの才はもっとなかったらしい。でも、人に愛された。そのことにほっとする。参列者と一緒に元ダンナをこき下ろしている母ですら、離婚後は

他人同然だったのに、当たり前のように喪主を務めていた。
「まだクソ暑い時期だってのに」
「あのバカは最後まで気が利かねえ」
「レスラーが交通事故で逝きやがって」
大男たちが九月の空をにらみ、還っていく盟友に毒を吐いている。
どれも語尾が湿っていた。気の良い人ばかりだった。乱暴な言葉に包まれた悼みを誰もが共有していた。
ただ一人、二十三歳の一人娘を除いては。
事故死ということで、亡骸の顔を見ることも叶わない別れだった。
実感できていなかった。
あたしは、おどの死を受け止めきれていなかった。

簡素で騒々しい葬儀を終えても、遺族にはやることが残っている。おどの住居の後始末を済ませ退居費用を精算すると、故人が遺したお金はちょうど底をついた。
住人を失ったアパート一階の部屋。玄関のドアを閉めて振り返ると、砂利道に残された遺品

が目に入る。
「こういうの、東京でも粗大ゴミで出せないよねえ」
伊豆で看護師を務める母が不機嫌そうに煙草をくゆらせている。
「あんたの職場で処分できない？」
「うちは直すの専門だからね」
乗り手を失った鋼の馬。小型のアメリカンタイプのバイクで、燃えるような紅色をしている。
ＧＮ１２５。
といっても普通の人はさっぱりのはず。沼津で二輪整備士をやっているあたしは何度か触ったことがあった。
小柄で気の良いオジサンみたいな車輌で、四十年ほど前に日本で誕生、今は中国メーカーが引き継いで生産している。デザインは昔のままでレトロそのもの。
ミラーにかけられたヘルメットを手に取る。フクザツに臭い。汗とか整髪料とか、色々なものがまじった匂い。故人がたしかに生きていた証の匂い。
ふいに薄い記憶が蘇る。言葉が降りてくる。

秋田にはよ、宇宙一ウマい――。
「あたし決めた。ちょっくら行ってくる」
あの人に似ているかもしれない、あか抜けない、時代に取り残されたバイクのタンクに手をやりながら告げた。
「ちょっくらって、どこによ」
「秋田にだよ、おかあちゃん」
行かなきゃいけないと思った。そのための翼は目の前にある。

雅香(みやか)――。
油まみれで働く整備士にふさわしいかはともかく、自分の名前は気に入っている。
ちなみに、おどには〝がっこ〟と呼ばれていた。
「がっこ、来年は学校だなあ」
サムいギャグをかまされた記憶があるけれど、当人はウケ狙いではなかったらしい。
がっこは秋田の漬物で、燻した大根を使ったぬか漬けが〝いぶりがっこ〟。
「秋田に根っこがある娘だ。ぴったりじゃねえか」

うちの姓は伊吹だったので、
――いぶきがっこ。
娘の誕生直前まで言い張り、嫁のガチギレを招いたそうだ。あぶなかった。母に感謝。
そんな彼女が煙草をくわえて難しい顔をしている。
遺品のバイクで日本海沿いに走って、秋田へ――。
「で、目的が・・・・・うどん？」
「宇宙一ウマいうどんだって」
「宇宙人はうどん食わないゾ」
四十五歳はリアリストだった。別れたダンナを思い出したのか眉をひそめ、あごでバイクを示す。
「この、ちっこいので行くわけ？　あんたでかいの乗ってるでしょ」
「愛車は沼津だよ。車検の整備中なので」
「で、こいつの出番か」「一応、整備はしてあるっぽい」
「電車か夜行バス使え」「金欠なので」
一人娘は主張する。宇宙一ウマいうどんが食べられる場所。そこに行けば親子の距離がつか

めて、父親の輪郭がはっきりする気がすると。
「ゴリラの顔がクリアになると、何かいいことあるのかよ」
「そうしないと言えないから」
「文句を？」「違うよ」
息を吸い、思い切って言葉を吐き出す。
「ちゃんとサヨナラを言えないから」
煙草一本分の沈黙があった。
「ったく、メンドクサイことに拘るところは、父親そっくりだ」
肩をすくめ、財布から数枚の福沢氏を差し出してくる。
「かあさま、ご支援に感謝です」
受け取ろうとした手がぴしゃんと叩かれる。
「ばか。やるわけないだろ」
母の考えは斜め上をいっていた。
「ヘルメット買ってきな。おしゃれなやつだぞ」

１２５ｃｃのバイクは、二人乗りはできても高速や自動車専用道路を走ることはできない。
秋田まで下道だけで一息に行くのは厳しい。途中の新潟で一泊することになる。
電話で職場に忌引き休暇の延長を申し出ると、
「どうした、東京で何かあったがか」
「秋田までツーリングしたいっす」
「てめえぶっ飛ばすぞ」
アットホームでブラックな職場です。でも、社長の声は笑っていた。
「かあちゃんの許可はもらったがか」
「一緒に行くって言ってます」「……」
許可が出た。でも条件付き。
「秋田によ、いぶりがっこって名物があるらしい。酒のあてに買って帰ってこい」
よりによってそれですか……。
新潟まで走る半日の間で、相棒となったＧＮ１２５の特徴はほぼつかめていた。
小排気量だから車体もタイヤも細くて頼りない。スピードだって出ないけれど、のんびり走るには十分。燃費だっていい。

時代遅れで野暮ったい。クセ強めだけど、そこそこ働く――。

あの人も自分の分身みたいな相棒にまたがり、でかい背中を丸めて、サーカスのクマみたいに東京をぐるぐる走っていたのか……。

「けど意外だったよ。おかあちゃんも秋田に興味があったんだね」

フザケンナ、と後席からヘッドバットをかまされる。

「別れたダンナの故郷とかどうでもいい」

「じゃあなんで来たのよ」

「ちょいと落としたものがあってね。そいつを取りにだ」

秋田の警察署にでも寄るのだろうか。

母は取っていなかった夏期休暇を同行のスケジュールにあてていた。ちゃっかりジーンズの上下とブーツでキメている。

新潟駅前のビジネスホテルに着いたのは夕方の四時。走行距離三百五十キロ、九時間かかった。

「思ったより乗り心地よくて疲れなかったな」

「運転手はめっちゃ疲れてます。いたわってください」

夜に新潟港を出発するフェリーに乗れば、早朝には秋田港に到着できる。でも今回は貧乏……じゃなくて節約ツーリングなので、今夜はホテル泊まりだ。

ご飯を食べて寝るだけの時間を過ごすと、翌朝は国道７号に沿って北上する。

信濃川の穏やかな水面を横目に、ハンドルにつけたスマホのナビに従って走ると、一時間足らずで新たな景色が開けた。

沼津や伊豆で見るのとは違う海。どこがと訊かれると難しいけれど、重々しさとか力強さを感じる。ヘルメットの下、あごのあたりにあたる風が涼しげなものになって、北国に来たのだと実感する。

秋田まで、あと六時間。

宇宙一ウマいうどんはどこにあるのか。答えは子どもの頃に遡る。

埼玉に住んでいた数年間、名ばかりのプロレスラーだったおどは、いつもママチャリをこいでいた気がする。

アルバイトや買い物、市民センターのジムへの往復。結構な頻度で、後ろにはあたしが乗っていた。

ライオンみたいな金色の後ろ髪がおでこに当たってこそばゆい。でかい背中で前は見えず、そのくせ左右の風景はすごい勢いで過ぎていく。怖くなって見上げた空に、がらがら声のド下手な唄が吸われていく。

トレーニングの一環だったのか、目的地を決めずにペダルをこぐことも。大らかというか大雑把というか、何も考えてなかったのか。

ある冬の日の午後。おどは駅前を過ぎると、国道に沿ってわっせわっせとチャリをこぎはじめた。

普段より激しく、速かった。心にたまった何かをぶつけているみたいだった。プロレスかアルバイトで何かあったのか、母との喧嘩か。当時のあたしにはわからない。

交通量の多い国道沿いを走ること数時間。娘が飽きた、寒い、お腹すいたーと文句を言うのにくたびれた頃、チャリは止まった。

「うっし、ここで腹ごしらえすっか」

駐車場には数台の自動車が。背の低い、褪せた壁の建物に〝オートパーラー〟と謎の看板がかかっていた。

「あそこで、ごはんできるのー？」

窓の向こうには黒くて四角い機械ばかりが並んでいて、食事なんて出てきそうにない。唇をとがらすと、大きな手が下りてきて、髪をごしごしされた。

その店は、令和の今ではほぼ失われた食堂を兼ねたゲームセンターで、ドライバーの休憩場所だったらしい。

店内にはゲームの音と光があふれていた。目を丸くする娘の手を引いて、金髪の大男は店の一番奥へ進んでいく。

そこに並んだ機械を見て、あたしは歓声をあげた。

ジュースにアイスクリーム、カップラーメンにトーストサンド。ガムの販売機まであった。

ほしいものばかり。ここはきっと天国だ。

「どれか・・・・・一つだけだゾ」

いやに不安そうな保護者をよそに、あたしは夢中で自販機の前を何度も何度も往復した。

最終的に足が止まったのはキレイなパネルの前。赤と黄色が配されてアートっぽいのに、躍るのは〝うどん〟と〝そば〟の文字。

「これがいい」「どっち？」「うどん！」

いいねえ、とおどはジャージのポケットを探り、数枚の硬貨を大事そうに機械に入れる。太い指でうどんのボタンを押すと、にいっと笑った。

ぺこぺこのお腹には長く感じられたけれど、実際は三十秒もかからなかったかもしれない。

「熱いからよ、フーして食いな」

機械からうどんを取り出すと、近くのテーブルに置いてくれた。

つゆの香りが湯気と一緒に立ち昇る。麺の上に天ぷらまで載っていて、見ているだけでお腹が鳴った。

割り箸を受け取ったけれど食べられない。おどは自分の分を買っていなかった。

「ン？」いいの、と目で問うと、

「ン！」いいよ、と頷いた。

小さな指で割り箸を握り、麺をすすった。

「ウマいか？」「ン！」

冷え切った体にアツアツのうどんがしみわたる。世界一おいしいと思った。

「けどよ、もっとウマい自販機のうどんがあンだぞ」

彼は、あの言葉を口にしたのだった。

世界一じゃなく宇宙一。あたしは何も突っ込まなかったと思う。目の前の横顔に淋しさの陰を感じていたから。

故郷に錦を飾りたい。そのために手を伸ばすのに、何一つつかめず、苦難に抑え込まれそうになる。それでもカウントツーで立ち上がる――。

当時の彼は、こんな状況だったのでは。今になって思うのだ。

笑う人もいるかも。でも、あたしは笑わない。

帰り道は二人で唄をがなりながら帰った。

「そのうち、秋田で宇宙一のうどんを食わせてやっからな」

そのうちは来なかった。

妻と別れ、おどの相棒はママチャリからバイクになった。その後席には誰もいないけれど……。

彼は、どんな想いでGNにまたがっていたのだろう。

「せっかく秋田に着いたんだ。地鶏に地酒、地ビールも！」

「ジージーうるさいですね。セミの季節は終わったよ」

「とにかく豪勢なもの食べたい」

母は遠征の目的が自販機うどんであることが気にくわないようで、煙を吐いたり文句を言ったり忙しい。

山形との県境を越え、昼前に由利本荘市に入ったところだった。秋田市方面に向かう本荘大橋の手前で、本日四度目の休憩をとっている。

ニコチンを愛する相方のせいで距離が稼げない。缶コーヒーまでとるからトイレも近い。用足しのあとに煙草。その繰り返しだった。

「うまいもの食べたい！　自販機うどんとかイラネ」

あたしはにこやかに声にトゲを含ませる。

「おかあさま、嫌なら降りてもいいのですよ」

目的の場所は下調べしてある。仙北市の角館町。ここまで海岸沿いに国道7号を走ってきたけれど、秋田市には入らず東に転進する。山間を縫って秋田街道を進んだ先にある施設がゴールだ。

いよいよ山道に入るのに、この期に及んで四十五歳はぐずっているのだった。

「うどん食べたあとで豪遊しなよ」

「自販機より店の稲庭うどんのほうがウマいに決まってる」
「何か行きたくない理由があるみたいですね」
「そんなものはない、あるわけがない」
煙をぶはっと吐いた。怪しい。でも尋問する時間はない。
尻を叩いてバイクに乗せて走り出す。１０５号から秋田街道に入り、山道を東へ。
昼前のせいか交通量は多くない。快適ではあるけれど、二人乗りなのでスピードは抑え、路面の状態を気にしながら慎重に走った。
「みやかさーん、やっぱやめませんかー」
後ろの荷物がうるさい。無視して運転する。
名前も知らない背の低い山々に見守られ、うねる街道を縫う。空がとても広い。九月なのに、永遠に夏休みが続いているようだった。
ついにＧＮは止まった。エンジンの火を消す。
達成感を抱いてナビを確認。二日間の走行距離、六百八十キロ。
到着地点、雲沢観光ドライブイン。
おどが言っていた〝宇宙一のうどんが食べられる場所〟だった。

ドライブインは古民家風の建物だった。窓に〝自販機〟や〝ゲームコーナー〟といった文字が躍る。建物のてっぺんに〝二十四時間営業〟と誇らしげに看板がかかっていた。

昼時のせいか駐車場は思いのほか混雑している。歴史を感じるものの、今も現役の施設なのだ。

驚いたのは農業用のトラクターまであったこと。地元の人にも愛されているのは何だか嬉しい。

隅っこにバイクを停めると、母と二人でヘルメットをぶら下げ、建物の前に立った。

三つの棟が並んでいて、左から旅館、自販機とゲーム、普通の食堂。それぞれ役割が異なるらしい。

「あっちでカツ丼にしようぜ」

妙に嫌がる母の手をつかまえ、中央の棟に連行する。

ガラス戸を開けて中に入ると、あの冬の日の記憶が蘇った。

ジュースにアイスクリーム、カップラーメン。自販機天国だった。もちろん、あの機械も。

埼玉にあったものと同じ機種だった。あの時のメニューは〝うどん〟と〝そば〟だったけれ

ど、ここの機械は〝ラーメン〟になっている。
旧友に再会したように思わずパネルをなでてしまう。ずいぶん古い機械のはずなのに、まだ頑張っていて偉い。
勇んで硬貨を入れる。一杯三百五十円。
「天ぷらうどんでいいよね」
まさかラーメンとは言わないでしょ。背後の相方の返事も聞かず、ボタンを押す。
機械の奥でごとごと音がして、ボタン上の表示がカウントダウンしていく。
三秒、二、一、完成。
下にある取出口に手を入れる。
「……こいつは事件だ」
うどんがない。取出口には何もなかった。
「おかあちゃん、うどんが消えてしまった！」
突然のミステリアスな展開に振り返るも誰もいない。
母まで消えていた。

あたしは諦めが悪い。執念深く行方不明になったうどんの探索を続け、取出口をのぞいていると、

「さっきから何してらんだ」

背後から咎める声。振り返ると日焼けした顔が。ゴム長靴を履いたジイちゃんで、駐車場にあったトラクターの持ち主だろうか。

「若ぇ娘が、がめは感心しねな」

首根っこをつかまれた。認めたくないけれど、あたしの外見、特に髪の色は誤解を招きやすい。お年寄りのウケが悪い気がする。

ばたばたと潔白を主張すると、老人はようやく手を離してくれた。

「すまねな。こえだば、たまに調子がわりぐなるんだ」

「故障、ですかね」

顔が引きつっていたと思う。宇宙一のうどんを食べるため舞い上がったのに、途中でロケットが墜落した気分。

「店主に言っても、すぐには直らねがもしれね」

ジイちゃんは自分の落ち度のように申し訳なさそうに謝ってくれたけれど、あたしの心は虚(うつ)

けたままだった。
希望が消え、母も消えて。
そういえば、あの風来坊な看護師はどこに行ったのだろう。
自販機コーナーの先にもう一画ある。のぞいてみると窓の字の通り、ゲーム機コーナーになっていた。自分で電源を入れてから遊ぶ仕組みのようで、今は一台しか光が灯っていない。
その唯一の台で看護師が背中を丸めて戯れている。
ヒンシュクをまぶして咳払いを送ってやると、
「こいつは動いてるのが奇跡みたいなゲーム機だよ。遊べる時に楽しんでおかないとな！」
いや、奇跡は東京からバイクで来て、脱衣麻雀に励んでるあなただと思います。
「自販機うどん、どうだった？　ウマかった？」
それがね、と無念な状況を報告する。
思ったより彼女は驚かなかった。
「あの手の機械は骨董品だからね。人間も一緒。長く稼働してりゃ調子も悪くなるって」
「達観ですな。年の功ってやつ？」
四十五歳の渾身のエルボーが飛んできた。

「これでも長いこと医療現場にいるからね。過ぎた期待はしない。最悪の結果を覚悟する」
楽観せず、かといって悲観をしすぎない。人生に絶望しないコツなのだと、ゲーム画面でリーチをかけながら言った。
「えがった、こさいだが」
さっきのゴム長ジイちゃんがまた現れた。
「バイクがあったがらよ、間に合ってえがった」
手を取り何かを握らせてくる。硬貨が四枚。三百五十円だった。
「ダメだよジイちゃん」「えがら、えがら」
節くれ立った太い指は返すことを許さず、笑顔には親切さがにじみ出ていた。
「立て替えるだげだ。あどで店主からもらうがらよ」
あどな、と機密をもらすスパイみたいに声をひそめる。
「自販機のうどんが食いでゃなら〝せりおん〟さ行げ」
おや、おしゃれっぽい名前ですね。
「秋田でよ、一番に空さ近ぇとこだ」
ちょっとドヤ顔で小鼻をふくらませている。秋田県民の自慢の名所か。行けばいいことある

かも。
「おかあちゃんも、そう思うでしょ？」
返事の代わりにうめき声。
振り込んだ母がうなだれ、貴重なゲーム機をバンバン叩いていた。

セリオンとは秋田港にあるポートタワーのこと。ＳＥＡとＰＡＶＩＬＬＩＯＮを併せた名前なのだそうで……。
うどん自販機は、県内では雲沢のほかに二カ所に存在する。ジイちゃんが言う〝せりおん〟は、その一つだった。
「ここまで十分に頑張った。うどんは諦めて、レッツごちそう！」
食い意地の張った荷物を後席に乗せる。
「ここまでやったからこそ、うどん食べないと」
最初の予定とは違ってきたけれど意地になっていた。再びＧＮのエンジンに火を灯す。
秋田街道をもどって山間部から海の方へ。秋田市内に入って港を目指す。
国道を運河沿いに北へ走ると、巨大な塔が姿を現した。

道の駅あきた港、ポートタワーセリオン。全高百四十三メートル。県内でもっとも「宇宙に近い場所」。

天空へ延びるガラスの塔の先には、三色団子みたいなアンテナがついていて、親しみやすいというか、少しファンタジーな雰囲気も。

「天空の冒険！　勇者がガラスの塔を駆け上がる、みたいな」

「ガラスの掃除が大変そうだねえ」

やはり四十五歳はリアリストだった。

道の駅らしい広々した無料駐車場の隅っこに小さなバイクを停め、スマホを頼りに周囲を確認する。

ガラス張りはタワーだけではない。目前の低層の建物もそうだった。セリオンリスタという屋内型の公園で、植物園みたいなものか。左に高層タワー、右にはセリオンプラザという多目的ホールがあって、運河に面したイベント広場を囲んでいる。運河の先は日本海。

目当ての自販機はセリオンリスタ内にある。まずはそこへ、となるはずだったのに、あたしは辺りの風景に心を奪われていた。

駐車場の向こうで何本もの釣り竿が上下にのんびりと揺れて、運河に垂らした糸を煽ってい

るのが見える。対岸では発電用の巨大風車が六基、優雅に空をかいている。
「もっと上から見たくなっちゃうね」
かたわらのタワーを見上げる。五階にある展望室は百メートルの高さにあって、日本海や男鹿半島、秋田市内をぐるりと見回せるとのこと。
「せっかくだから昇ってみない？」
「あんた、昔から高いとこ好きだったよねえ。父親とそっくりだ」
憎々しげにイランことを言う。
「秋田って海と山しかないゾ。お金はらって上から見たって一緒だ」
失礼なことまで言った。
「入場無料みたいだよ」「仕方ないね、ぜひ昇ろう」
タワー内のエレベーター乗り場に向けて歩き出す。

上から眺めてみると、秋田の街の在り方がよくわかった。
北と東は山々が、南に雄物川（おものがわ）、西は運河を経て日本海。思いのほか平野部は狭い。
ここに限らず、市街地って意外に狭いと思うことが多い。限られた土地で人は懸命に生活を

営む。あたしはそのことにほっこりする。

休日に愛車で伊豆半島を回ることが多いけれど、地元の人が日常で行き来する道が好きだ。地に足の着いた生活を見たり感じたりすると、自分も頑張らなきゃと思えるのだ。

三百六十度の展望を見回すと、運河の河口では淡水と海水で線を引いたように色が別れていた。世界は広いのに、外にはもっと広い場所がある。そう示すかのように。

ガラス越しの空を見上げる。宇宙ははるか遠い所にあって、懸命に手を伸ばしても届かない——。

おどのことを思わずにいられなかった。

ディアボロ嘉男。彼のリングネームだった。

「悪魔って意味だっけ？」

「〝ボロボロ〟ってカンジだったけどな」

メジャー団体のレスラーになることは叶わず、それでも諦めきれずにインディーのリングにしがみつき、がむしゃらにファイトした。

メジャーじゃないので奮闘がテレビに映ることはない。ネットの海を漁っても、マニアのブログなどで小さなピンボケ画像がたまに見つかるだけ。

葬儀の際、下町プロレスの人が語ってくれた。あいつは頑なに秋田への遠征は拒んだと。わがままとは言いたくない。おどなりの意地で、インディーだから許されたのだろう。

メジャー団体の王者になって、ベルトを携え秋田に凱旋する夢。叶わなかった夢。でも、想いの欠片は残っている。

おどは一度だけインディーのマイナー王座を獲得したことがあった。ベルトを巻いた姿をネット上ではなく、引っ越しの際に見つけたアルバムの中で見た記憶がある。

「あの写真、今はどこにあるのかな」

「さあ、押し入れのどっかにあるんじゃね」

実は娘は疑っている。額に入れて、伊豆の母の部屋に飾ってあるのではないか、と。

ガラス張りのエレベーターで下界にもどり、隣のセリオンリスタへ移動する。

名物になっているのか、入り口に〝自販機営業中〟のポスターやのぼりまであった。期待が高まる。いよいよ食べられる。

緑と光あふれる公園内はガラス張りで解放感があって、散在する樹木が目に優しい。

「こういうとこで一服するとウマいんだよねえ」

不埒なことを口にする連れの手を引いて奥へ。観光客のみならず、地元の人にとっての憩いの場でもあるようで、平日の昼過ぎにしては人が多い。
少し歩くと二階通路へ続く階段があって、下の空間が飲食用の休憩所になっていた。
そこに人だかりができていた。何やらざわついている。
不穏な予感に人垣の先をのぞいてみると、見覚えのある機械が。パネルに張り紙があった。
〝本日売り切れ〟。
大人気ですな、などと感嘆してる場合ではない。あたしが食べられないじゃないか。
故障の次は、売り切れ。
何コレ何なの。秋田の好感度が大幅ダウンする。
怒りを共有しようと相方を見ると、
「まあまあ、気にしない気にしない」
ゴキゲンな声。いつの間に手に入れたのか、ピンクと黄色の鮮やかな戦利品をなめている。
「うどんの前にアイスですか」
「ババヘラっていうんだって。ウマいな、これ」
協調性ゼロ。よく看護師が務まるものだ。

憤って張り紙とにらめっこしていると、
「そこの、めんけ姉っちゃよ」
めんけとはめんこい、カワイイって意味ですよね。あたしのことですよね。
好感度アップ。ふにゃりと振り返ると、何故か隣の四十五歳も同じ動作を。
「おかあさま、めんこいの意味わかってらっしゃいます？」
「かわいいって意味だよ。あたしのための言葉だよ」
声をかけてきたのは野球帽のオッチャンだった。釣りの帰りなのか、短く縮めた竿を持っている。
釣り師は母娘のバトルに配慮したのか、
「どっちも、めんけぞ」
改めて言ってくれる。とても良い人だ。母と娘は一時停戦する。
うどん難民の二人に、オッチャンは耳より情報を授けてくれた。
「そんたに食いでゃなら、男鹿さ行げ。あそごならきっと大丈夫だ」
県内三カ所目の設置場所を教えてくれた。すでに調べてはあったけれど、地元民のお墨付きがあると心強い。

「オッチャン、ありがとね」
「こっちの人間はおーぎねって言うんだ」
「じゃ、おーぎね」
三カ所の自販機のうち二台は空振り。残る一台にかけるしかない。
一方で、ほっとした気持ちもあった。ガラスとはいえ空を覆われたこの場所で食べても、宇宙一のうどんにはならないと思うから。
時刻は午後二時。残された時間は多くない。

ポートタワーを後にして、海岸沿いの県道５６号を一時間ほど北上すると、そこは男鹿半島。景色は淋しげな灰色の割合が増え、地方の郊外の街に来たのだとわかる。
「これでこそ遠くから来た甲斐があったってもんだよ」
停車するなり母のテンションが爆上がりしたのは、店先のうどん自販機のせいではなかった。
男鹿水産と建物に記された会社名のほかに、端のひさしにこうあった。
〝カニ直売所〟と。

歓びのカニ歩きで店に入っていく相方に呆れつつも後に続く。まあ、自販機は逃げないので。

販売所に入ると、先客がかぶりつきそうな勢いで、茹でたての紅ズワイガニに見入っている。

「めっちゃ真剣だね」

「無理矢理に夏休みとったから、看護師長にワイロわたさないと」

「ベテラン社会人の知恵ですな」

あたしも職場環境のことを考えて売り場を見回す。カニの種類も値段も豊富だった。気軽に買えるものもありそう。

ワイロの送付手続きを終え、いよいよ時は来た。

直売所を出て店先へ。うどん自販機にはひさしがついていて、その前にはベンチも置かれていた。法律の関係で、この形態にしないと許可が下りないそうだ。

自販機と向き合い、硬貨を握って疑り深くあたりを見回す。また何か起こるんじゃないか。

三百円は機械にあっさり受け入れられて、点灯した選択ボタンを押すと、年代物の機械は動きはじめた。

二十五秒で完成。問題なくアツアツの一杯が出てきた。
「それでは、いただきます」
まずは、つゆを一口。
ン？　ちょっと、というか……かなり薄味？
「どう、宇宙一ウマいのかにゃ？」
娘の渋い顔を見て、意地の悪い四十五歳がにいっと笑う。
「ンー、悪くはない……かなあ」
「あんたって唄も味もオンチだよね。父親とそっくりだ」
侮辱に耐えていると、仕事を終えた漁師だろうか。手ぬぐいを頭に巻いたひげのオジサンがやって来た。
うどん愛好者のようで、慣れた様子で一杯を調達すると隣に座った。左手にコーラのペットボトルを握っている。
何と、うどんにコーラをドボッとかけた。
「姉っちゃもやってみな」
よせヤメロと制す間もなくドボッ。何をしやがるのだ、このひげオヤジは。

敵は顔をくしゃりとさせ「食ってみろ」と手振り。悪意なくヤバいことをするサイコパスなのか。
逆らうのも怖いので仕方なく従う。おそるおそる口をつけてみる。
「あれ、これって……！」
いい。とてもいい。美味しい。
コーラのボトルだけど中身は麺つゆの素だったらしい。味を濃くしてくれたのか。
ひげ紳士の説明によると、たまに機械の調子が悪くて薄味になってしまうそうで、
「わざわざ、とぎぇ所から来てけるふと（人）もいるがらよ」
麺つゆのボトルを持ち歩いているのだという。中に思いやりも入れて。
紳士はあっという間に一杯を平らげ、長居はせずに立ち上がる。
「へばな！」
意味がわからず顔を見合わせる母と娘に、
「まだな、サヨナラって意味だ」
そうだ、この言葉をあの人に送るために、あたしは秋田に来たのだった。
へばな、ひげのオジサン。おいしいうどんと優しさをありがとう。

見送ったあと、空になった器に目を落とす。
「満足したかい？」「うーん……」
素直にうなずけない自分がいる。
茜空のいわし雲を見上げる。宇宙ははるかに遠すぎて、自販機のうどんを食べても、おどが近くなった気がしない。彼の面影も曖昧なままだ。
さえない娘の表情を見ても母は笑わなかった。真顔のまま、ぽつりと言った。
「この場所じゃないからね、あんたが求めてんのは」
〝宇宙一〟が食べられる場所が、ほかにもあるのだろうか。
「でも、まだ早いかな」
何故か空を見上げて言葉を継いだ。
「その前に、ちょっと寄ってほしいところがある」
「まだ何か食べるの？」
言っただろ、と母はバイクに向けて歩き出す。
「落としたものを拾いにいくんだよ」

実りの季節ではあるけれど、目の前に広がるのは幸福すぎる世界だった。
一面の田んぼが豊穣の神様の祝福を受け、黄金の海に。風が疾ると、穂が重たげに揺れて波となる。波の過ぎたあとは干し草のような匂いが漂い、見る者の胸を不思議な懐かしさで充たす。
「二十年ぶりぐらいに来たけど、やっぱりいいところだねえ」
母も煙草は手にしていない。缶コーヒーを抱いて、稲穂の波を見つめている。
男鹿を出て潟上（かたがみ）市に来ていた。奥羽本線の羽後飯塚駅と井川さくら駅の間には、どこまでも続く田園風景が広がっていた。
黄金の海の中、浮島のように小さな社があった。あたしたちは未舗装の道にＧＮを停め、鳥居の横で実りの風に吹かれている。
「初めて知った。秋田には天国があったんだね」
「あんた、前にも来たことあったゾ」
ここにいたけど、と母は自分の腹を指して笑った。
「その時に、ここで……されたわけよ」「あ、そうなんだ」
スマホをいじろうとしたら、ふくらはぎにカーフキックが飛んできた。

「オイ何だよ何されたのか聞けよ！」
「どうせチューされたとかでしょ。まるで興味ないっす」
そうじゃないよ、と母。
「落としものの話だ。長くて、ちょっと苦いけどな」
思いがけず遠い昔の話がはじまった。

プオタ看護師と新人レスラーは〝知人を介した食事会〟で出逢ったそうだ。プオタとは〝プロレスオタク〟のことである。
「酔っぱらって〝オレだけのリングドクターになってくれえ〟とか言いやがって。こっちはナースだっての」
「で、お持ち帰りされたのですね」
エルボーが来た。軽い一撃だった。照れているらしい。
二十数年前の秋、三年の交際を経た二人は秋田に来たのだという。このまま夫婦になるのか。その決断をするため、おどが故郷で一番好きだったこの場所を選んだ。
当時の母は仕事がノってきたところで、おどはぱっとしないレスラー稼業を続けていた。

このまま二人で歩くべきか。なら、どの道を歩けばいいのか。
「結婚。かわいい子ども。王者のベルト。三つの夢が叶ったら……」
目の前の稲穂みたいな金髪をなびかせて言ったそうだ。
秋田で一緒に暮らさないか――。
だからオレと一緒にいてほしい。子どもも生まれる。あとはリングの上で必死に頑張って、その証を腰に巻いてみせる。
「ガチのプロポーズだったわけね」
「決めるには若すぎたし、早すぎたけど」
結局、二人を結んだのは新しい命、あたしの存在だった。
「あんたのおかげで悪魔と結婚するハメになったよ」
おどけながらも、その目線は何かを求めるように黄金の海を行ったり来たりしている。
「二十年あまりも前の二人の夢だったものが、この辺に落ちてる気がしてね」
振り返ることは許されても、落とした夢を拾うことはできない。その現実を確認しているようにも見えた。
おどの夢が叶い、この街で暮らしていたら、母の人生は違っていただろうか。より良い道を

歩めていただろうか。それは誰にも答えられない。誰かが決めることでもない。

聞いたことがある。秋田は全国で比較した幸福度の数値が低いと。

幸せは数字で測るものだろうか。指数で決まるものだろうか。人の心は数字ではない。おどは故郷の秋田を愛したから帰ることを願い、錦を飾ることを夢見た。

あたしは今、バイクで走り回ることができる。望んだ仕事に就けて頑張れている。

それは両親がいたおかげで、おどの根っこがこの秋田にある以上、あたしもこの地と繋がっている。彼が言った通り〝伊吹がっこ〟でもあるのだ。

母は踏ん切りがついたのか、缶コーヒーを飲み干すと、

「ここまでしゃべっちまうと、行かないわけにはいかないか」

土埃にまみれたＧＮへと歩きながら、次に目指す場所を口にした。

「えっ、だって、そこは・・・・・」

太陽は西に隠れ、空に薄闇がとけはじめている。

「この時間から見えるものもあるんだよ」

母はそれ以上は語らない。

よくわからないまま、あたしは小走りで後に続いた。

潟上から再び雲沢ドライブインへ――。
薄暮の秋田街道を慎重に走ること一時間。目的地に着くと陽は完全に沈んでいた。
「本当にここでいいの？」「ああ、まずは一服」
パシリとして自販機の棟にコーヒーを買いにいかされる。
半日ぶりの機械たちとの再会。そこで奇跡が。うどん自販機の筐体（きょうたい）が開いていて、白髪頭のお父さんが機械をいじっていた。問題が解決したようで、頷くと筐体を閉じた。
あの、と声をかけてみる。
「うどん、買えますか？」「ちょうど修理終わったどごろだ」
不調の部品を交換したのだと説明してくれた。
「昼間さ、とぎぐ（遠く）がら来てけだ女の子が、がっかりして帰ったって聞いでねえ」
「それ、あたしです。また来たんです」
そうがい、間に合ってえがったと、お父さんは顔をほころばせた。
財布を開こうとすると横から手の平が。いつの間にか母が来ていて、仏頂面で百円玉を押しつけてきた。

「・・・・・くれるの？」娘は疑いの目。
「悪魔の野郎にも食わせてやりな」
ハイ。お金を受け取る。
あの日のおどがそうしたように、硬貨を一枚一枚、大事に入れる。
出てきた一杯は相方の手に。結局、自分も食べたかったのか。
もう一杯買い、二人でうどんを抱いて外に出た。お行儀悪いけど、立ったまま並んで食べることに。
うどんをすすると湯気が昇っていく。おどの魂が故郷の空に還っていくようだった。
「なかなかの味だ」「うん、とてもいいね」
ドライブインのゴム長ジイちゃん。
セリオンリスタの釣り師のオッチャン。
男鹿の、ひげ紳士。
機械を直してくれた店主のお父さん。
秋田に来て、とうに分かっていた。この土地の、人の優しさや温かさが、かき揚げよりもずっと美味しいトッピングであることを。

「二十四年も前、ここで、この時間に、プロポーズの返事をしたんだ」
母の頬が心なしか赤らんでいる。
「おかあちゃんにも乙女の時代があったんだねえ」
歳月は残酷ですな、とせせら笑うと敵の脚がモーションに入った。
カーフキックか。その動きは見切った。
よけたつもりが膝上にローキックを食らった。
痛みにしゃがみ込む。顔を上げると視界に思いがけないものが。
「おかあちゃん、宇宙が降りてきた！」
星々の絨毯が、宇宙が頭上にあった。
二人はアスファルトに腰を下ろす。うどんを抱いて身を寄せ合う。
「結婚ＯＫしたあと、こうやって二人ですすったの思い出すよ」
「たしかに宇宙一ウマいうどんだね」
満天の星の下、最愛の人と食べる自販機のうどん。おどにとっての〝宇宙一〟は、たしかにここで、この時間にしか口にできない。
父親との距離が一息で縮まった気がして、彼の笑顔が鮮明に像を結んだ。

初めて大切な人の死を実感する。涙はこぼれなかった。もっと温かなものが胸にあふれていたから。

サヨナラじゃない。この秋田の宇宙の下、父と娘は根を伸ばして繋がっている。

「へばな、おど。じゃあね、お父ちゃん！」

立ち上がり、星空に向けて声をあげると、

「ほんと・・・・・父親にそっくりだ」

「今度は何よ。どこが似てんの？」

「金色の後ろ髪の雰囲気とか、あの人とそっくりだ」

母の慈しむような優しい目。娘はうっと声をつまらせる。

ひょっとして、あたしが金髪なのは父親の影響だったのか。

そのことに気づいたら何だか急に照れくさくなって、残りの麺をずずっとすすった。

小説の部　ふるさと秋田文学賞　受賞者のことば

壁を超える

牧野恒紀

授賞式の前、隣席で高齢と思しき紳士が、ご婦人と談笑していた。どうやら女性は過去の受賞者らしい。迂闊な私も隣人が柴山芳隆先生であることに気づいた。

ご挨拶をさせていただくと、若造の私にも祝いの温かな言葉を贈ってくださった。穏やかな物腰で、丁寧に生きてこられた方なのだと感じ入った。壇上の最終選考担当のお三方もまた、齢を重ねてもなお、確かな仕事をこなされている。

翻(ひるがえ)って自分はどうか。丁寧に取材する、安易に方言を使うべきでないといった、先生方の過去の講評は読んでいた。全くおっしゃるとおりだ。自分もそうすべく予定していた秋田

行きは、七月末の大雨によって断念せざるを得なかったが、これに不可抗力という言葉をあてはならないのだと思う。指摘された作品の瑕疵はすべて作者に責がある。この失態は今後の作品で挽回しなければならない……。

式からの帰り道、旭川の水面をながめながら、ふと学生時代の恩師の言葉が思い浮かぶ。

「君の小論文、読み物としては面白いんだけど。真面目に資料読んで書いてほしいんだよねえ」

渋い顔をしつつも甘い点をつけてくれた。今回の受賞も、これに近い気がする。

人間の性根は変わらぬものなのか。書き手として、生き方として、この壁を超えていきたい。

今回の授賞に関わってくださった全ての方々に御礼を申し上げます。おーぎね、へばな！

第10回ふるさと秋田文学賞　小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

男鹿の花嫁

中村　均・作

男鹿の花嫁

目に映る景色は、厳しい冬を乗り越えた大自然の喜びにあふれていた。木々の芽は吹き始めて、いよいよ若葉たちも顔を出し始めたところのようだ。燦々と降り注ぐ太陽の光を気持ちよさそうに浴びている。ぽつぽつと視界に入ってくるピンク色は、今が見ごろの桜たちだ。抜けるような青い空の下で、その存在は際立って見える。

長距離運転は久しぶりで、最初のうちはハンドルを握る手につい力が入ってしまっていたが、窓の外の景色が緊張を徐々に解きほぐしてくれた。私の心はいつになく凪ぎ、家を出るまで両手いっぱいに抱えていた不安は、秋田県に入る頃にはどこかへ消えてしまった。

助手席に目をやれば、妻の奈津子は首を左に九十度倒すようにして眠っている。さっきまで緊張した面持ちで、前後左右の窓の外を慌ただしく眺めては「ねえ、どこに行くの」と訊いていたが、今は気持ちよさそうに夢の中だ。美容院で白髪染めをしているが、すでに根元の方は白くなっている。あらためて顔を見ると、しわもずいぶん増えたように見え、ともに歩んだ年月の長さを実感せずにはいられない。

国道四十六号線を西へと走らせていく。春のまどろみを誘う穏やかな車内の空気に、わずかに窓を開けて空気を取り込むと、まだ少し肌寒い空気が頬に吹きつけてきた。その風に、ふと夢の中から現実に戻ったかのような錯覚に陥った。私は確かめるように奈津子に視線を向けた

が、やはり目を閉じ眠っている。
今では奈津子が眠っているときが、私の心が最も休まるときとなってしまった。
車を走らせながら、私はあのときのことを思い出していた。

「若年性アルツハイマー型認知症で間違いないですね」
三十代半ばくらいの女性医師は、パソコンのディスプレイに映った頭部のＭＲＩ画像をしばらく見ていたが、こちらに向き直ると、はきはきとした口調でそう告げた。
「画像を見ていただけますか」
脳の画像が何コマもモニターに並んでいる。そのうちの一つを選んで拡大表示させると、
「ここに脳の萎縮がみられます」と指差し、その理由、影響などについて説明を続けた。
私は相槌を打ちながらも、実のところ言葉はまったく頭に入っていなかった。画像に目をやったのは最初だけで、焦点はその先にある診察室の白い壁へと移動し、少しくすんでいる部分を見つめながら、若年性アルツハイマー型認知症という言葉を何度も頭の中で再生させていた。
「……ですね。お分かりになりましたか」

長い説明が終わり、医師は再び私の方に目を向けた。私は「六十一歳でも若年性なんだ」と口にしていた。

医師は困惑した表情を見せた後、咳払いを一つした。

「六十五歳未満で発症する認知症を、若年性認知症っていうんです」

「そうですか……」

なぜもっと早くつれてきてあげなかったのか。

過去の自分への怒りが湧き、強烈な自己嫌悪が襲ってくる。

「症状が顕著になったのは最近かもしれませんが、おそらくもっと前から、そうですね、二年前とか三年前とか、それくらいから症状は出ていたものと思われます」

そうじゃなかったですかと、切れ長の目が責めるように私に向けられる。

二、三年前かと、私は宙を見つめた。

その頃は年相応という言葉で片づけていたのかもしれない。名前がパッと出てこないとか、昨日の夕食に食べたものが思い出せないとか、頼んでおいたものを買い忘れるとか、そんなことはよくあった。だが白状すれば、その頃の私は仕事に夢中で、仕事のためにだけ生きていたといっても過言ではない。忘れっぽい奈津子のことを気にもかけていなかったし、まして、認

知症になりかけているなんて露にも思わなかった。

初めて疑念を抱いたのは一年くらい前のことだったか。休日に一緒にスーパーへ買い物に行ったときだ。

「あら、臼澤さん、こんにちは」

声をかけてきたのは、家が数軒隣の中本さんという奥さんだった。私は軽く会釈をした。

中本さんとは同年代で、子どもが同級生だったこともあり、様々な場で母親同士で交流があり、奈津子が中本さんと立ち話をしている場面を何度も見かけていた。

だから、当然中本さんは奈津子に声をかけてきたのだろうが、当の本人は中本さんの顔を見てもぽかんとした様子で、何か言葉を返すこともなく、買い物カートを押して進んでいってしまった。

中本さんは右手を頬にあて首を傾げて立ち尽くしていた。その様子を見ていた私は慌てて「すいません」と頭を下げて、奈津子を追った。

「どうして無視したの？　喧嘩でもしたのか」

私は横に並んで責めるように問いただした。奈津子は「えっ」と声を上げ、私を見た。

「あの方、私は知らないわ。あなたの知り合いなんだろうなって思ったけど違うの」
「えっ？　あの人、中本さんだろ」
「中本さん？　そんな人、私は知らないわ」
奈津子は呆れたように肩をすくめてみせ、歩を進めた。
最初は私をからかっているのかと思ったが、冗談にしては顔が真剣で、私は返す言葉が見つからなかった。
このとき、もしかして認知症じゃなかろうかという疑念が一瞬脳裏をよぎったが、最近疲れがたまっているからど忘れでもしたのか、何か大きな心配事があって気が回らなかったのかなどと、そのときの私は今の事象に対する言い訳を探してばかりいて、まあそういうことだろうと自己解決していた。
その二か月後にも、こんなことがあった。
東京に住んでいる、二十八歳になる一人息子、聡志が連休に一泊二日で帰省した。奈津子は聡志の大好物であるハンバーグを夕食に作って出した。翌日、聡志は東京へ帰っていったのだが、ハンバーグはその日の夜も、次の日の夜も、つまり三日連続で出てきたのだ。
最初は、張り切って多く作り過ぎた余りものだと思っていたが、台所にあったレシートを見

つけ、毎日ひき肉を買ってきていることを知って眉をひそめた。
「聡志はもう帰ったんだから、毎日ハンバーグ出すのはやめてくれ」
私が苦言を呈すと、奈津子は「えっ、聡志帰ったの？　いつ」と驚きの声を上げ、私はその言葉に耳を疑った。知らないはずがない。聡志が玄関先で「じゃあ帰るから」と手を上げ、「気をつけて帰ってね」と奈津子が手を振っていた場面を、私はこの目でしっかり見ていたのだ。
「おいおい、一昨日帰っただろう」
「えっ、一昨日？」
奈津子は一瞬息を呑み、「あ、あー、そうだったわ」と取りなすように言い、愛想笑いを浮かべていた。

あのときには既に、奈津子は自分の異変に気がついていたのだろう。奈津子の寝顔を見ながら、もう少し早く病院に連れていってあげればと、自責の念に囚われていた。考えてみれば、似たような出来事は日々の中でいくつもあったのだ。年相応で括ってしまい、深く考えなかった。いや、ただ真実を知るのが怖くて逃げていただけだった。

午前九時に盛岡を出発し、国道四十六号を秋田方面へ二時間ほど運転した。道の駅の看板が見え、休憩のため立ち寄ることにした。

協和の道の駅という場所で、大型トレーラーが何台も停められるような広い駐車場があり、天気がいいからか多くの車が停まっていた。建物の横には広大な芝生のエリアが広がっていて、子どもが遊べる遊具や、さらに山側にはパークゴルフ場もあった。

奈津子を起こすと、目をこすりながらここはどこかと訊いてきた。

「協和の道の駅。ちょっと休憩していこう」

外へ出て産直へと歩く。

「ねえ、これからどこに行くの」

今日何度目かの同じ質問だった。

「男鹿に行くんだよ」

今日何度目かの同じ答えをした。

「男鹿？　何しに行くの」

「夕陽を見に行くんだよ」

「夕陽？」

どうして、というように視線をさまよわせる奈津子を見て、切なさがこみ上げる。
そもそも男鹿に夕陽を見に行きたいと言ったのは奈津子だった。

三か月ほど前、警察から職場に電話がかかってきた。
「部長、電話です」
近くの席の部下が言った。私のデスクの内線電話が鳴り、受話器を取ろうとして手を伸ばしながら、「どこから」と訊いた。部下は、「あの」「えっと」と歯に何か挟まっているかのように口ごもるので、私は何となく嫌な予感がした。直感的に奈津子からだと思った。奈津子が何かしでかして、困って電話をかけてきたのだと思った。
「うちのやつからか？」
部下は首を左右に振り、息を吐いてから泣きそうな顔で「警察からです」と言った。
ざわついていたフロアが瞬時に静寂に包まれ、視線が一斉にこちらに向いた。
奈津子だ。奈津子に何かあったんだ。
私の心臓は体内で誰かが太鼓を打ち鳴らしているかのように強く波打ち、全身に鳥肌が立った。

電車に飛び込んだとか、家が火事になったとか、最悪な事態が瞬時に脳裏に浮かんだ。

ここ二週間ほど、明らかにおかしい状態が続いていた。

家に帰ると、電気もつけずに暗闇の中で魂が抜けたかのようにボーッとしていた。夕食が作れない、作り方が分からないと消え入るような声で言った。人参やじゃがいも、キャベツなどの食材は台所には並んでいたが、何も調理されていなかった。そんな馬鹿なと思ったが、「だったら総菜でも買ってきて、皿に並べてくれれば気づかないのに」とわざと明るく言えば、「財布がどこにあるか分からない」と首を振った。だが財布はいつもの場所に置いてあった。

そうじも疎かになった。掃除機の使い方が分からないのだと言う。洗濯しても干すのを忘れていた。衣服のたたみ方も分からず、フローリングに乾いた衣服が散乱している。

まともじゃない。病院に連れていかなければならない。インターネットで症状を書き込んで検索してみると、妻の身に起こっている症状はすべてが認知症の症状だと分かった。

早く病院に連れていかなければと思ったが、無意識のうちにブレーキがかかった。連れていったが最後、認知症の診断が下ればもう逃げられないと思い、この期に及んで見て見ぬふりをしてしまった。

一昨年、会社の定年が六十歳から段階的に六十五歳まで引き上げられることに決まった。そ

の時点で六十歳だった私は、あと一、二年働いて退職しよう、第二の人生を奈津子とゆっくり、たまには旅行でもして送ろうと考えていた。わずかながら蓄えもあり、もらえる年金もさしたる額ではないが、つつましく生きる分には十分であった。

だがそんなプランももはや水の泡と化した。警察と聞いて、何があったのかを聞く前にもう、取り返しがつかないことをしてしまったという激しい後悔が襲ってきた。

恐る恐る受話器を取ると「臼澤守さんですか」と確認された。「はい」と返事をすると、

「実はですね……」

相手はそこで言葉を区切った。時間にして一秒か二秒ほどの間が恐ろしく長く感じられた。

「今、あなたの奥さん、臼澤奈津子さんを警察署で保護しています」

「……保護……というと、無事なんですね」

「はい」

全身の力が一気に抜けた。

聞けば、奈津子はスーパーに買い物に行った後、帰り道が分からなくなり、道端でしゃがみこんで泣いていたそうだ。何事かと通行人が声をかけ、警察に通報し、駆けつけた警察官が保護したそうだ。

課内の皆からの視線を感じながら、私はもう仕事をやめなければならないと観念した。
「ごめん」と先に帰ることを部下たちに詫びながら、本当に謝らなければならない相手は奈津子だと思った。

協和の道の駅には黒豆ソフトクリームというご当地ソフトがあり、二人で食べることにした。建物の横の芝生が広がる場所でベンチに腰掛けた。ソフトクリームは黒豆の味が確かにして、風味も強くておいしかった。
雲もなく、春の柔らかな日差しと優しく吹きぬける風は最高に心地いい。
「このソフトクリーム美味しい」
奈津子は子どものように口元にクリームをつけながら、笑みを浮かべて言った。私はその表情を見ているだけで、旅行を決心してよかったと思った。

仕事はすぐにやめた。すぐに奈津子を病院に連れていき、認知症と診断を受けた。最後まで自分が奈津子のことを支えていくと、そこで覚悟を決めたはずだった。
だが一日中認知症を患った奈津子と一緒にいるのは大変だった。仕方のないこととはいえ、

同じことを何回も訊いてくる。根気よく、初めて訊かれたかのように答えるよう努めてはいた。それでも、疲れがたまっていたり、忙しいときなどは、「それさっきも訊いたでしょ」と、つい声を荒げてしまった。これから出かけるからと、一日に何度も化粧をしたり、財布がない、返せと被害妄想が出てきて私を罵倒してきたり、いつの間にかいなくなっていて、近所を徘徊していたり、片時も目を離すことができなかった。

だが奈津子も一日の中でも症状に波がある。急に我に返り、「どうしてこんなこともできなくなっちゃったのかしら」と涙を流したり、「迷惑ばかりかけてごめんなさい」と頭を下げたりする。そんな様子を見ていると、一番つらいのは奈津子なんだと、自分の苦労なんてかわいいものだと思えてきて、これくらい我慢しなくてはと反省する。

そんな胸の内を、以前は息子になんて言うことはなかったが、抱えきれずにこぼしたときがあった。

「ちょっと二人で旅行でも行ってきたら」

電話口で聡志はあっけらかんと言い放った。

奈津子に何かあったら、いや、むしろ奈津子が何かしでかしたらどうするんだ。旅行なんてとんでもないと、瞬間的にそう思った。

「思い出の場所とか二人でめぐってくればいいじゃん。母さんも昔の記憶はまだあるんでしょ。喜ぶんじゃない」

そうだ。もう新たに起こったことを記憶することはできなくなっているが、昔のことはまだ覚えていることが多い。

昨日の夜もそうだ。テレビでは、かつて二人で映画館に行って見た映画が放送されていた。それを見て奈津子は「この映画懐かしい」と言った。「覚えてるの」と問えば、「付き合って三回目のデートのときに見た映画よ」と、私が忘れていることまで事細かに覚えていた。

黙っていると、聡志はさらに話を続けた。

「もう父さんも退職して、自由の身でしょ」

これが自由と言えるのかと、フンと鼻が鳴った。

「考え方次第だよ。仕事もないんだから、時間に縛られてないわけでしょ。何も気にせず、何日でも旅行に行けるんだよ。二人で行ってきなよ」

聡志の言葉に私の心も揺れ動き始めた。退職したら二人でゆっくり旅行したいと思っていた。そしてそれはもう無理だとあきらめていた。でも今が実行するときなのかもしれない。

奈津子が若年性認知症と診断されてから、病気について色々調べてみた。認知症の薬は進行

を遅らせるだけで治すことはできないらしい。だからもう一生この病気と付き合っていくしかない。あとはいかに進行を遅らせるかだ。

大事なのは脳に適度に刺激を与え続けることだ。外に出ると何をするか分からないから、ついつい社会とのつながりを絶って孤立してしまいがちだが、それがかえって、病気の進行を早めてしまう結果になる。

「どんどん外に出て人に会いましょう」

あの女性の医師も、私を励ますためか、ぎこちない笑みを見せながら勇気づけてくれていた。介護保険の申請をして認定を受ければ、デイサービスに通うこともでき、そうすることで私にも自由な時間が生まれるので、ぜひにと勧めてくれた。だが、まだ人の手は借りたくない、自分が面倒を看ると断った。

昔やっていたコマ回しやけん玉、オセロといった遊びも脳の機能維持にいいし、パズルも、たとえ最後までできなくても、考えることが脳に刺激を与えるのでいいのだと本で読み、二人で一緒に遊んだりもした。

それなりに努力してきたのだ。それがいつの間にか、大事に作り上げてきたものを外から壊されたくないと、気持ちが守りに入り、逆に刺激を遠ざけようとしているではないか。

「考えてみる」と言って電話を切ると、ソファーに座ってテレビを見ている奈津子に、旅行に行きたいか訊いてみた。
「行きたい」
思いがけない明瞭な声での即答だった。
「どこに行きたい？」
奈津子は「うーん」と唸りながら天井を見上げ、ややあって「男鹿に行きたい。男鹿に行って、夕陽が見たい」と言った。
なぜ男鹿で夕陽を見たいのか、ピンときた。三十年前、私が奈津子にプロポーズしたのは男鹿の夕陽を前にしてだった。その場所から私たち夫婦はスタートしたのだ。
男鹿の最北端には入道崎（にゅうどうざき）という岬があり、そこは夕陽の絶景スポットだった。なだらかに広がる芝生とその先には高さ三十メートルの断崖、そして見渡す限りに青い海が広がっている。
「男鹿の夕陽を見ながら告白されれば、どんな女もイチコロだぜ」
当時、職場のプレイボーイな先輩が、飲みの席で得意そうに語るのを、私は遠巻きに見ていた。女性を口説くのに情景とかシチュエーションとか、そんなものに頼るべきではない。自分の魅力で落としてこそ、真の男だろう。なんて偉そうに思っていたのに、ここ一番というと

き、私は先輩の言葉にすがらずにはいられなかった。

奈津子にとってはプロポーズをされた場所になる。その場所に行きたいというのだから、私は奈津子の心情を色々と想像し、じんと胸が熱くなった。

退職し、時間に制約がないのだから、行きたいときに行き、帰りたいときに帰ればいい。私は念のためスマホで天気だけ確認し、ここ数日は崩れる恐れがないことを確認した。

「よし、じゃあ明日、男鹿に行こう」

思い立ったが吉日だ。奈津子の顔が少女のように華やいだ。

協和を過ぎて、国道十三号線に入った。道の両側には田んぼが広がり、のどかな田舎の景色が続く。田植えはまだされておらず、掘り起こされ露出した黒い土に陽の光が降り注いでいる。古びた家が点在し、山の方には杉林が広がっている。伐採された丸太が幾重にも積み上げられているのが見え、丸太を積んだトラックが何台も行き交っている。色が薄れ読めなくなった看板、シャッターが下りて久しいであろう、昭和時代に栄えたであろうドライブインが、今はただ廃墟と化して寂し気にたたずんでいる。

十二時をまわり、昼食をとるために目に入ったラーメン屋に立ち寄った。こちらも店の上の

看板が色あせていて、店名が読めないほどだった。立てかけてあるのれんの「ラーメン」という文字だけが、ラーメン屋だと教えてくれる。

こじんまりとした古びた外観に一抹の不安を感じながら、たてつけの悪い引き戸を開けた。私たちよりも一回りは年齢が上であろう、老夫婦が切り盛りしているようで、「いらっしゃいませ」とのんびりした声が出迎えた。お昼時なのに店内にはその二人以外誰もいなかった。カウンター席が四席と、四人掛けのテーブルが二つあり、私たちは四人掛けテーブルの方に案内された。

二人とも中華そばを注文し待っていると、再び奈津子が「これからどこ行くの」と訊いてきた。「男鹿だよ」と言うと、ちょうど通りかかったおばあちゃんが、「はぁー、男鹿さいがれるのぉ」と言って何度も頷き、「男鹿はいいとこだす。おたくさんらはどこの人？」と訊いてきた。「岩手の盛岡です」と答えると、「盛岡もいいとこだあ」と、またしても何度も首を縦に動かした。

それで立ち去るかと思いきや、「ところで注文まだだったども」と言ってペンと紙を持ってメモを取る体勢になった。

「ばあさん、中華そば二つって、もう注文取ったべ」

厨房から旦那さんが声をかけ、「んだったか」とおばあちゃんは頭をかいて笑った。その顔に私と奈津子も顔を見合わせてクスッと笑った。

「すいませんねえ」

旦那さんは調理しながら頭を下げるが、目は笑っていて楽しそうだ。

やがて運ばれきた中華そばは、子どもの頃によく食べたような、懐かしさを感じさせるシンプルなしょうゆ味でおいしかった。奈津子も「おいしい」と言って麺をすすっていた。

私たちが食べている間、老夫婦は並んで客席に座ってお茶をすすりながら、仲睦まじげにテレビを見て談笑していた。おばあちゃんはきっと認知症なのだろう。でもこういう風に楽しく生きていけるんだと、思いがけず勇気をもらった気がした。

店を出てさらに国道十三号線を進んでいく。秋田市内に入ると次第に道は広くなり、道の左右には様々な店が立ち並ぶようになった。交通量が増えてきて、中心部へと近づいているのが分かる。

「聡志はなかなか結婚しないわね」

信号で止まったとき、突然奈津子が口を開いた。私は驚いて奈津子を見た。窓の外に目をやっていた奈津子が私に視線を向け、微笑んだ。

「べつに焦ってないみたいだからな」
聡志は一人っ子なので何かと甘えてくるところがあるが、親ばかかもしれないが、心優しい男に育ったと思っている。長くお付き合いをしている女性はいるようだが「結婚はまだいい」と、本人にその気はないようである。
「焦っていないんじゃなくて、決断できないだけよ。あの子も優柔不断なんだから」
「あの子、も？」
も、ってなんだ。他にも誰かいるのかと思っていると、「あなたそっくりよね」と奈津子が言った。
「えっ」
「さっきのラーメン屋でも注文決めるのに長いこと悩んでいたじゃない」
自分では遅いと思っていなかったが、思い出してみれば、いつも奈津子の方が注文を決めるのが早い気がする。でも優柔不断と言われるほどだろうかと考えて、ハッとした。
奈津子がついさっきの出来事を記憶している。
それは、ここ数か月ずっと一緒に過ごしていた私にとって、奇跡のような出来事だった。これは・・・・・やはり旅行という、いつもと違う刺激が脳にいい影響を与えているのかもしれな

い。

そう考えていると、妻が続けた。

「聡志もそう。外食のときはいつもあなたと二人してずっとメニューとにらめっこしてたわ。服を選ぶのだってなんだって長いこと考えてた。よく言えば慎重ということなんだろうけど、結婚はそれでは困るわ。私だってずっと思ってたのよ。あなたがいつになってもプロポーズしないから、ひょっとして結婚する気がないのかしらって不安だったんだから」

いつになく饒舌な奈津子に喜びたいところだったが、話の内容からそうもいかずに必死に言い訳をした。

「いや、もちろん結婚したいと思っていたけど、自信がなかったんだよ。本当に奈津子のことを幸せにできるのかって」

昔のことを思い出し、あの頃の感情が蘇る。愛があれば大丈夫と結婚に突っ走ることもできたのだろうが、ふんぎりがなかなかつかなかった。これを優柔不断と言わずして何と言おうか。

そして、奈津子が言うように私と聡志が似ているのならば、もしかしたら聡志も同じ気持ちでいるのかもしれない。

「だから男鹿でプロポーズされたときは、嬉しいというより、やっとだわって、すごく安堵したのよ」

奈津子はそう言って私を見てフフフと笑った。奈津子の快活な状態を久しぶりに見た気がして胸が熱くなった。認知症が進むと感情が希薄になり、笑うこともなくなっていくと聞く。やはり感情が分からないのはつらい。笑顔というのがこんなにも人を幸せにするというのを、私は長い人生で初めて知ったような気がする。

ついに道路案内の標識に「男鹿」の文字が見えた。真っすぐ進んでいけば男鹿に着く。

そうだ。今度、聡志にも先輩の言葉を教えてやろう。男鹿の夕陽の前では、プロポーズは必ず成功するらしいぞと。そしたらあいつ、何て言うだろうか。きっと気になりながらも偉そうに、そういうのに頼りたくはないんだって言うだろう。そんな姿を想像すると可笑しくて、一人笑ってしまった。

「海よ、ほら」

奈津子が窓の外を指差して声をあげる。三十年ぶりの男鹿を前に胸が高鳴っていく。背の高いポートタワーのある秋田港を通り過ぎ、車をさらに北上させる。

振り返ってみると、家族で旅行した記憶がまったくなかった。仕事では東京や仙台に出張を何度もしていたので、休みの日まで遠出をしたいとは考えなかったのだ。どこまでも自己中心的だったと、海が見え、はしゃいでいる奈津子を見て後悔した。こんな素敵な笑顔で旅を彩ってくれるんだから、これからも色んなところに連れて行ってあげたいと、強く思った。

国道七号線から百一号線へと曲がり、海沿いの道を進むと「道の駅てんのう」という道路標識が見えた。そこで唐突に視界に現れたのは、空に向かって美しく伸びる白いスカイタワーだった。周囲に高い建物もなく、不自然なほどに天に伸びるその白い塔と、それを囲む空の水色のコントラストに私は心奪われ、迷わずハンドルを切った。

案内版を見ると、思った以上にこの道の駅は広いことが分かった。サッカー場や大きな池、それを囲むように多数の広場などがあり、さらには日帰り温泉施設もある。一日ここにいても飽きないくらいの充実度だ。

お土産品が並ぶ店内でぶらり商品を見て回っていると、「見てー」という奈津子の声がした。そちらを向くと、奈津子がなまはげの仮面を手に取って顔に重ねていた。

「泣く子はいねえかあ」

奈津子がものまねをして言った。

「うわぁ、出た、鬼嫁」
私はおののくフリをする。
「ちょっとー、誰が鬼嫁よ」
奈津子が仮面を外して笑いながら私の肩を叩く。
こうやって普通に話せている時間があると、病気は嘘なんじゃないかと思ってしまう。
症状に波があると、医師は言っていた。穏やかなときがずっと続いてほしいと思うが、そう甘くはないことを、この数か月で経験し知ってしまった。だからこそ、こんな楽しい瞬間を大事にしたいと思うのだ。
その後、無料だったのでスカイタワーの展望台まで上がってみた。高さが約六十メートルあり、なだらかに広がる田畑や緑が周辺には広がっていて、その先には私たちが目指していた男鹿半島、日本海が見えた。
男鹿へのはやる気持ちを抑え、カフェに立ち寄った。二人でコーヒーを飲み、一息ついていると、奈津子がテーブルにあるメニュー表を見て言った。
「まろみそソフトだって。みその味がするのかなあ。気にならない？」
「でも午前中にも協和でソフトクリーム食べたよ」

「食べたっけ？　食べてないわ。私は記憶にないもん」
奈津子は何か含んだ笑みを浮かべている。
「じゃあ二人で一つ食べようか」
私はそう言って、一つだけ買いミニスプーンを二つもらってきた。
「あっ、本当にみその味がする」
一口食べた奈津子が目を丸くした。
「本当だ。みその味だ」
「おいしい」
ソフトクリームを間に挟みながら向き合って食べ、私は数口食べると残りを奈津子に全部あげた。おいしそうに食べる奈津子を見ながら、コーヒーを口に運んだ。口の中の微かな苦味が一か月前のことを思い出させた。

我が家には二十年ほど使い続けたコーヒーメーカーがある。毎日、朝食後に奈津子が入れてくれ、それを飲んでから仕事に行くという習慣になっていた。作り方も難しくない、ありふれたものであったが、ある日、奈津子はコーヒーメーカーの前で途方に暮れ、キッチンのテーブ

ルで新聞を読んでいた私に助けを求めてきた。
「コーヒーの淹れ方が分からないの」
そうは言ったが、カップには黒い液体がそそがれていた。香りもコーヒーのそれだし、どうみてもコーヒーにしか見えず、「できてるじゃないか」と言ってそれを一口すすってみた。途端に強烈な苦味が舌を襲い、砂のような粒が口の中でざらついた。とても飲めないと、慌てて私は流しに吐き出した。
コーヒーメーカーをよく見ると、コーヒーの粉末があちこちにまかれていて、サーバーには大量に沈殿していた。
奈津子はキッチンの床の上に顔をつけ泣き崩れた。自分で今までできていたことだという自覚があり、それが病気の進行によりできなくなっているという自覚が、彼女の精神を崩壊させていく。
「怖い。どんどんできなくなっていくことが怖い。何もかも分からなくなるなんて嫌。そんなの嫌よ」
涙で頬をぬらしながら奈津子が声を震わせる。私は彼女をそっと抱き寄せ、子どもをあやすように背中をさすった。

「大丈夫。大丈夫だから」

何の根拠もない言葉であるのは重々承知だ。私だってこの先どうなっていくのか不安だ。だが、奈津子の恐怖を受け止めてあげられるのは自分しかいない。奈津子に、そして自分に、私は「大丈夫だ」と声をかけ続けた。

再び車に乗りエンジンをかける。

「どこに行くの」「男鹿だよ」と言葉を交わす。

窓を開ければ潮の香りが鼻腔をくすぐり、ウミネコが空を優雅に漂っている姿が見えた。途中、男鹿の玄関である観光案内所で、とてつもなく巨大な二体のなまはげ像に出迎えられ、否が応でもテンションが高まっていく。

海沿いの道を進んだ。ゆっくりと海を眺めたくなり、どこかの漁港に停車して車を降りた。海風が優しく肌を撫でていく。ウミネコが気持ちよさそうに羽を広げて空を舞い、海面にと着地する。その海面は太陽の光を存分に浴びて、宝石が散りばめられているかのように輝いていた。

奈津子は堤防に沿って歩いて行き、先端のところで大きく両手を広げてみせた。そして振り

向いて目が合うと「気持ちいいね」とほほ笑んだ。
この一年見ていなかった笑顔を、今日、取り戻すかのように何度も向けてくれる。それだけでもう、胸がいっぱいになる。
私は「そうだ」と両手を打った。
「夕陽までまだ時間はあるし、釣りをしようよ。竿は持ってきたんだ」
せっかく海まで行くのだからと、物置に長いこと眠っていた釣り竿を二本持ってきたのだ。聡志が小学生の頃まで、三人で何回か一緒に釣りをしたことがあり、道具はそろっていた。ただライフジャケットだけは旅行に行く直前に新調した。
釣れればラッキーくらいの気持ちで、ちょっとだけ久々に竿を投げてみよう。
一度車に戻り、道具を持ってきた。奈津子にライフジャケットを着せていると、「私、やり方が分からないわ」と言った。
「大丈夫。ただ釣り糸をたらすだけだから」
私は奈津子の釣り竿の針にルアーという小さな魚の疑似餌をつけた。
「これを海に落としてあたりが来るのを待つだけだ」
堤防から一メートル先に針を落とし、底に着いたらリールを巻いて糸を張らせる。

二人で海に竿を出し、じっと待った。うららかな春の日の空気が、運転の疲労や日々の悩み、病気の不安を消してくれる。

しばらく待っても反応がなければ、また別なポイントへと針を落としてみる。奈津子も見よう見まねで別な場所を探っていく。しかしなかなかあたりはなく、時間だけが過ぎていく。早朝と夕方が釣りのゴールデンタイムだから、まだ少し早い。それにまだ春先で水温が低く、魚の活性も低いので、釣るのは簡単ではない。釣れれば儲けものだ。だが、人間とはあさましい生き物で、やっているうちにやはり一匹くらい釣りあげたいと欲が出てきてしまう。

三十分ほど釣りに興じていただろうか。ふいに奈津子が声を落として言った。

「ねえ、さっきからツンツンされている」

「魚が来てるんだ。慌てないで、そのまま」

奈津子の竿先がググッと沈み、竿が弓のようにしなった。

「かかった！」

私は思わず声を上げた。奈津子が助けを求めるように私を見た。奈津子の手に自分の手を添え、一緒にリールを巻きあげる。深くないのですぐに海の中から魚影が見えてきた。海面から姿を現したのは二十センチほどのアイナメだった。

大きくはなかったが、釣りあげたことに何よりも喜びがあった。私たちはハイタッチをし、バケツの中にアイナメを入れた。奈津子は満面の笑みを浮かべている。

二人でしゃがみこんで、じっと見つめた。

「子どもかしら」

「そうかもね」

「逃がしてあげよっか」

慈しむようなまなざしを向ける奈津子に「そうだな」と言った。私は両手でアイナメをすくい、海に帰してやった。アイナメはあっという間に海の中に消えて見えなくなった。

その様子を見ていると、ふと聡志が生まれたときのことを思い出した。私は出張で東京にいた。まだ携帯電話が普及していない時代だ。宿泊しているホテルに電話がかかってきて、フロントが取り次いだ。

「生まれたわ、男の子よ」

疲れからか力のない声が受話器から聞こえた。母子ともに健康だと聞いて私はホッと胸をなでおろした。まだ男は仕事、女は家事育児という時代だ。私には出張をキャンセルして駆けつけるという選択肢は毛頭なかった。出張は明後日までだったので「明後日行くから」と言う

と、「そう」と、落胆したような声が聞こえた。自分の務めは仕事であると信じて疑わなかった自分は、その声の調子に少し苛立った。

「子どもを頼んだぞ」

そう言って、答えを待つ前に電話を切ってしまった。そのことが、なぜか今になって思い出された。

私たちは自動販売機でお茶を買い、堤防に座った。どこにでも売っている普通のお茶なのに、いつもより強い苦味が口の中に広がっていく。二人で海を眺め、時折何かを確認するように顔を見合わせた。付き合いだした頃のような、ただ傍にいられるだけで心が弾むような、久しく味わっていなかった感情に包まれていた。

日差しが午後三時を過ぎてだいぶ柔らかくなった。まだ夕陽には早いので先に予約してある旅館にチェックインすることにした。宿は今日の分だけ予め取っていた。その後は奈津子の症状にもよるので、まったく計画を立てていなかった。

地図で見ると、今いる場所から旅館は五分ほどで着きそうだった。海沿いを進んでいけば右手にあるはずだ。

奈津子は長旅で疲れたのだろう。助手席に座ると、もうどこに行くのかも訊かず、お茶を飲んで目を閉じた。

「すぐに宿に着くからな」

声をかけると小さく頷いた。

旅館はすぐに現れた。家が立ち並び、うっかりすると見落としそうなほどこぢんまりとした旅館だった。旅館の目の前に二台ほど駐車できるスペースがあり、二台とも空いていたのでそこに車を停めた。

女将さんが出てきて部屋に案内してくれた。外から見るよりは中は広く、創業当初の写真や、海で漁をしている写真、夕陽の写真などがいくつも飾られていた。

部屋に荷物を置き、一息してから再び外に出た。奈津子は不安そうにあたりを見回し始めるようになり、状態は下降線をたどっているのだと、焦りを覚えた。

「男鹿に夕陽を見に行くからな」

車に乗り込み、また説明した。奈津子は「オガ」と何度も呟き、その言葉の意味をうまく呑み込めないようであった。

男鹿半島の最北端である入道崎を目指した。陽はだいぶ低くなり、窓から入ってくる風も冷

たくなってきた。相変わらず左手には水平線が広がり青い海がどこまでも続いていた。三十年前にもこの景色を見たことを少しずつ思い出した。

たしか車内では喧嘩をしていた。今日プロポーズをすると決めていた私は、朝からずっと緊張していて、いつものように会話することができず、二言三言くらいしか言葉を発しなかった。それを私が何か不平不満をためこんでいると勘違いした奈津子が、「何か文句があるならはっきり言いなさいよ」と怒ったのだ。緊張しているだけだったが、正直に明かすこともできず、重苦しい空気の車内だった。

そんな緊張や空気をどこかに吹っ飛ばしてくれたのは、入道崎での絶景であった。草原のような緑が一面に広がり、白と黒の縞模様の灯台があった。海を臨めば百八十度コバルトブルーが広がり、地球という壮大なスケールを前にして、恋人たちの言い争いなど些細なことでしかなかった。

入道崎に着き車を降りた。息を呑む美しい景色にしばし言葉を忘れた。

「覚えてるか、この景色」

海の方へと歩き出しながら訊いた。奈津子は首を振った。

さっきまでの、表情豊かで病気を忘れさせるような姿の奈津子ではなかった。反応が悪く、表情がない。私は、三十年前二人で来たことを教えたが、やはり反応は薄かった。

「男鹿で夕陽が見たかったんだろ」

奈津子は眉間にしわを寄せるばかりだ。釣りのときの笑顔が幻だったのかと思えてくる。せっかく長時間かけて目的地にたどり着いたのだ。最高の笑顔を見せてほしかった。

手を引いて芝の上を歩く。少し風が肌寒くなり、奈津子に長袖シャツを着させた。あのときと同じように、何組かの男女が身を寄せながら座って夕陽を眺めている。

陽が海面まであとわずかまで沈んでいた。海面には太陽の光が映り、光の道のようにこちら側に伸びている。セピア色に染まった景色がノスタルジックな気分にさせる。

「きれい」

奈津子がぽつりと言った。

「そうだな」

三十年前と同じ、北緯四十度のモニュメントが並ぶ直線上の、海に近い芝生の上に座った。夕陽以外が徐々に闇の中へと消えていくのと同時に、三十年前ここに座っていた二人の姿がまぶたの裏に浮かんでくる。

男性の方はそわそわと落ち着きがない。視線をあちこち動かし、深呼吸をしたり、頭をかいたり、せっかく目の前にきれいな夕陽があるのに、意識は別な方へ向いている。女性の方はただ静かにじっと夕陽を眺めていた。すると、男性が突然立ち上がり、一歩前に出て女性に向き合った。女性はさっきまで喧嘩していたので、「何よ」と喧嘩腰の口調で、口を尖らせた。険悪な雰囲気だったが、男性は意を決して何かを言った。すると女性は両手で顔を覆い涙を流し始めた。そこでプツンと二人の映像が消えた。

甘酸っぱくもどこか満たされた空気に包まれながら、もう一度この景色を覚えていないか訊いてみた。だが奈津子は首を横に振るばかりだった。

「でもすごくいい場所ね」

風にそよぐ髪を押さえながら、夕陽をまっすぐ見据える彼女の表情が、刹那の美しさをたたえていた。

いよいよ太陽が水平線にかかった。周囲はいつの間にか静寂に満ちていた。皆が固唾をのんで、陽が沈むという、今まで一日の終わりに延々と繰り返されてきたことを見守っている。なぜ陽が沈むというたったそれだけのことが、人を切ない気持ちにさせたり、感動させたり、そして誰かに何かを決意させるのだろう。

大きく息を吸ってゆっくりと吐いた。
これも運命というものだろうか。
覚えていないなら、忘れてしまったのなら、もう一度、いや、何度でも言えばいい。
私は立ち上がると、あのときと同じように一歩前に出て奈津子に向き合った。今日から第二の人生のスタートだ。さあ、始めよう。
「結婚してください」
私はそう言って奈津子に手を差し出した。だが待てどもその手は宙に浮いたままであった。奈津子は状況を理解できていないようで、立ち上がってお尻についた草をはらっている。
近くにいた男女がこちらに視線を向け、コソコソと話しながら興味本位に見ているのに気づいた。
「頼むよ」
傍から見れば、私はただのフラれた人ではないか。
私は奈津子ともう一度向き合い、目で語る。
分かるだろ。プロポーズだよ、プロポーズするからな。
奈津子の目が私を捕らえた瞬間、もう一度私は言った。

「結婚してください」

しばしの間があって、奈津子の唇が動いた。私は彼女の言葉を強く、強く抱きしめた。

小説の部　ふるさと秋田文学賞佳作　受賞者のことば

秋田に感謝

中村　均

このたびは第十回「ふるさと秋田文学賞」において佳作を受賞できたこと、大変うれしく思っています。今まで経験したことのない、盛大な表彰式に参加できたことは、とても貴重な経験になりました。関係者の皆様、大変ありがとうございました。

私は秋田県のお隣、岩手出身で現在も岩手に住んでいます。秋田県には社会人になってから、旅行で行くようになりました。

秋田の好きな場所はたくさんあります。田沢湖、象潟、鳥海山など、美しい自然に魅了されて、何回か足を運んでいま

す。

でも一番好きなのはダントツで男鹿です。男鹿の景観は、岩手の海からは感じたことのない、スケールの大きさを感じます。上手く言葉で表現するのが難しいのですが、「ザ・地球」というフレーズがパッと頭に浮かびます。普段の悩みなどバカバカしくなるほど、圧倒的な美しさなのです。

この賞に応募するのを決めたとき、最初に決めたのはラストシーンでした。男鹿の入道崎で夕陽を見ている男女。この場所、このシーンを書きたくてラストシーンが最初に決まり、あとは逆算してストーリーを作っていきました。

私が好きな小説は、心が温まるような話や、勇気をもらえたり、前を向けるような小説です。

書くならそんな話を書きたいと思い、今回、認知症になった妻と旅行する中で、夫が決意を新たにする小説を書きました。認知症は本人もその周りの人も大変で、つらい思いをします。それでも、二人で前を向いて生きていこうとする姿に、少しでも心が震えた方がいれば嬉しいです。

第10回ふるさと秋田文学賞　エッセイ・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

秋田美人は背中美人

榎木　由紀子・作

秋田美人は背中美人

高校卒業後、東京で暮らすようになってから、「秋田美人」という言葉を知った。初めて会う人との定番の会話の始まりは
「どこ出身なの？」
もろちん、回答は
「秋田です」
すると決まって返ってくるのが
「お！　秋田美人」だ。
秋田にいるときは
「あら～美人だね」
なんてわざわざ面と向かっていう人もいないし、そもそも噂レベルでもいわれたことがない、可もなく不可もない普通のいでたちなのに、秋田を出た瞬間、秋田出身というだけで、美人といわれるのは、秋田出身者の役得である。
「秋田にはさぞかし美人が多いんだろうね」
もよくいわれるが、果たしてそうだったろうか。美人が至るところにうようよいて、美人麻痺していただけかもしれないが、日本中から美人が集う東京のほうが歩けば美人にあたるような

気がしている。

秋田美人といえば、世界三大美女の一人、小野小町が秋田出身というのは知られた話。以前、小野小町であろう絵を見たときは、眉毛がおかしな位置にある、よくみる平安時代の女性といういでたちで、正直いって、美人かどうかよくわからなかった。男性にめちゃくちゃモテたというエピソードもあるようだが、見た目の美しさではなく、歌人として恋文で世の男性陣の心を虜にしていたのではないかという説があり、歌人説のほうが自分的に納得した。

「秋田美人」にふれるたび、秋田美人のルーツや秘密めいたものが気になったが、ネットで気軽に調べることができない時代だったため、しばらく忘れていた。

自己紹介するたびに秋田美人といわれすぎて、おなか一杯になっていたころ、帰省時たまたま読んだ秋田魁新報で「秋田美人とは」の記事を目にした。

記事によると、日本海側に面し、山に囲まれた自然豊かな秋田県は、全国で一番日照時間が短く、浴びる紫外線が少ないことから色白が多い。一年を通して安定的に湿度が高い、特に冬の乾燥シーズンは雪が降ることで、湿度を保ち、きめ細かい艶肌を作り出す。といった根拠をつらつらと書き連ねていた。興味深かったのが、秋田県人にはロシアのＤＮＡが混ざっている説。ということは、色白で肌がきれいで欧米人のように目鼻立ちがぱっちりであれば秋田美人

に認定されるということだろうか。

祖母も母も生粋の秋田県人だが、農作業をしているせいか、色白ではないし、目鼻立ちはぱっちりしているどころか、鼻がついているかどうかわからないくらいちょこんとのっているだけ。わたしはというと、小学校から高校までソフトボール部で汗を流していたので、日焼けで真っ黒。冬に多少白くはなるものの、色白でお肌がきれいとは一度も思ったことがないし、いわれたこともなかった。そんな秋田美人像とはかけ離れた秋田時代から一変し、東京では、化粧に目覚め、日焼け止めを塗りたくり、さらに外で思いっきり遊ぶことをしなかったせいもあり、年々白くなり、単なる秋田美人から「あ〜だから色白なんだ。さすが秋田美人」といわれることが多くなった。

生粋の秋田美人であるはずの祖母はといえば、足腰が弱くなるとともに畑で農作業する時間が少なくなり、帰省するたびに顔色が悪いんじゃないかというほど白くなっていった。母もスーパーのパートに出かけることが多くなり、必然的に色白に。ソフトボールで共に汗を流し、色黒仲間だった友人たちも社会人となり、屋内での仕事が多くなったせいか、色白に磨きがかかっている。やはり秋田美人の色白説はあたっているようだ。

色白になるとともに、足腰の痛みがひどくなっていく祖母をみかね、痛みを軽減するべく、

帰省するたびに温泉に連れて行くようになった。肩もあがりにくい祖母は、ボディータオルを背中に回して、洗うことができず、適当にお湯をかけ、やり過ごしていた。

「背中洗ってあげようか」

と声をかけると、嬉しそうに、

「そいだば、ありがて〜な」

とボディータオルを手渡してきた。祖母の背後に回り、目に入ってきたのは透き通るような白さのまるで三〇代女子のような艶やかな背中。真夏でも長袖長ズボン、ビキニを着るような年代でもないから、きっと生まれてからずっと日にさらしたことがないのだろう。丸くなった背骨に沿って、タオルを上下に動かしていると、真っ白な肌が恋する女子の頬のようにほんのり赤くなっていく。

「おばあちゃん、痛い？」

と聞くと、

「なんも、いでぐね。気持ちいいど」

と気持ちよすぎるのか「もういいよ」の声がなかなかかからない。真っ赤になった背中にお湯をかけてまたびっくり。お湯が玉となって肌を滑っていくのだ。本当に八〇代の背中だろう

か。体を洗い終わった後、浴槽まで連れていき、ゆっくりとお湯に浸からせる。祖母はほっとけばいつまででも入っている長湯タイプなので、

「サウナに行ってくるね」

と声をかけ、その場を離れた。

二〇分後、祖母の様子を見に浴槽にいくと、段差に腰掛け半身浴をしている。その横に同じように半身浴をしている高齢女性二名がいた。湯けむりの先に座る三人は、後ろ姿だけなら三〇前後の女子といっても過言ではないほど白く艶々した背中だった。玉のような汗が次々と流れていく。日にあたっていないといえど、ここまでの艶肌はやはり生まれ持ったものだろう。見返り美人ならぬ背中美人。しかも、脱がないとみられない秘密美人。秋田美人をめとった殿方のみ見ることができる極上の秋田美人だ。

高齢になると温度調整が難しいとよくいうが、高温の温泉にいつまでも入り続けているおばあちゃんたち。生まれたまんまの裸の付き合いが距離を縮めるのか、いつのまにやら女子トークまで始めている。

「今年も雪がよぐふるな。腰いでして雪よせできねから玄関からでれねくて、裏からしか出入りできねくてまいっだ〜」

「なんも出入りできればそれでいいべ。春になればみな雪なぐなる」
「んだな～」
あははははと何が楽しいのか陽気に笑い合うおばあちゃんたち。
そこではたと思いあたった。友人たちも適当なのが多い気がする。なんとかなっぺ、誰かがやっぺ精神。このおおざっぱさ、いやおおらかさがノンストレスを生み出し、肌に現れ、表情を豊かにし、秋田美人を作っているのではないか。何気ないおばあちゃんたちの会話で秋田美人とはそもそも何かがちょっとだけわかったような気がした。
その後、足腰だけでなく、認知機能も低下していった祖母は、高齢者施設に入ることになった。施設入居からほどなく、コロナが蔓延し、面会が許されず、解除後も他府県からの帰省者は施設にも入ることを禁じられた。顔も見ず、声も聞けないまま、二年が過ぎたころ、祖母危篤の知らせが届く。急いで帰省するもまたしてもコロナに阻まれ、他府県在住者は病院に足を踏み入れることさえ許されず、ようやっと対面できたのは安置所。そっと顔に手を触れてみると保冷剤のせいかしびれるほど冷たかった。けれど、頬はとてもつやつやしていた。納棺の儀に際し、湯灌を行うとのことで、祖母の身体を洗い清める。ずっと寝たきりだったから背中がかゆかっただろうと、背中にそっと手をいれ、ちょっとのぞいてみた。温泉に入った時のよう

な生はもちろん感じられず、青く変色していたものの、滑らかな触り心地。そっと洗うだけでいいのに、一緒に温泉に入ったときを思い出し、ごしごしと一生懸命こすり続けた。しかし、あの温泉のときのように赤くなることはなかった。ああ、祖母は本当になくなったのだと思った。

祖母の介護と病院通いがライフワークのようになっていた母は、初七日が終わり、一通りの手続きを終えると気が抜けたようになった。今度はそんな母の気分転換になればと、温泉に連れていくことにした。そういえば、一緒に温泉旅行に行ったことはあれど、背中を流してあげたことはないなと思い、

「背中洗おうか？」

と声をかけると、祖母と同じようにうれしそうな顔をこちらに向けて、ボディータオルを渡した。

母の背中を見た瞬間、フラッシュバックした。親子だから似ているのは当たり前なのだが、祖母と全く同じ透き通るような真っ白な背中だったのだ。肌を滑り落ちる玉のような汗まで一緒。祖母が気持ちいいと言っていた背骨に沿って上下にひたすらごしごしする動きをしている

と

「あら上手ね。そこが一番気持ちいい」
と祖母と同じように目を細めて喜んでいた。ごしごしするたびに真っ赤になっていく背中を見ると、母は元気でまだ生きていると感じられた。
湯けむりごしに見る母の背中は、おぼろげでなんとも美しい。一緒に湯舟に浸かっている面々、いや背面も、みな、八〇オーバーだとわかっているのに、やはり背中だけは三〇前後女子のような艶やかさだ。湯舟の中ではまたしても女子トークが始まり、やはり最後は
「なんとかなるべな～」
あはははは と笑っていた。
湯けむりマジックだろうか、背中だけでなく笑っている横顔ですら美しい、これぞ秋田美人たるゆえんではなかろうか。
秋田は雪深く、冬がとてつもなく長い。太陽はほぼお目にかかれず、薄暗い日々が続く真冬は、寒々として、ときに生きる気力を奪う。祖母も母も
「冬はさびすて、なんもするきさねな」
といっていた。でも最後は、
「春がくるまで酒っこでものんでぬくだまっておけば、なんとかなっぺ」

で会話は締めくくられるのだ。

何を根拠に「なんとかなっぺ」と思っているのか、秋田県人ではあるけれどもいまだに理解できない。

秋田美人とは顔の美しさをさしているとずっと思っていた。祖母と母をみて、秋田美人といわれる秋田女の本当の理由はこの「なんとかなっぺ」からの他力本願、いや、おおらかさから人生が豊かになり、笑顔につながり、肌に現れ、そして太陽が届かない背中に現れるのではなかろうか。祖母と母の美人すぎる背中を見て思った。次の帰省も真の秋田美人に出会うために秋田の美を育む温泉に行こう。母とともに。

秋田美人は背中美人

一般名詞になりうるタイトル

榎木　由紀子

秋田在住時は、
「なんでこんなに何もない秋田に生まれちゃったんだろう」
と嘆き、秋田から出ることばかり考えていましたが、時がたち、都会にはないものがなんでもある秋田は自慢の故郷になりました。コロナ禍でリモートワークが推進され、秋田で仕事もできるようになり、滞在日数がどんどん伸びています。秋田での楽しみは、近所からいただく新鮮な野菜と母の手料理のほか、温泉です。近所のおばあちゃんたちの憩いの場として機能している、とある源泉かけ流しの温泉に通い詰めて

いるときに、感じたことを書き綴りました。

ふるさと秋田文学賞は、公募サイトでたまたま目にしました。驚いたのが選考委員の顔ぶれ。有名なプロの作家の方々に自分の文章を読んでもらえ、かつ選評までいただける機会はそうそうありません。初めての応募にも関わらず、佳作になり選評をいただけたのは本当に貴重な体験でした。

壇上で反対側に座る先生方の一言一句聞き漏らすまいと全神経を耳に集中しました。内館牧子先生が最初におっしゃった言葉はグサグサと刺さりました。

「タイトルがまずすぎます」

「小説、エッセイ問わず、本文の説明はタイトルにはなりません」

「週末婚、都合がいい女のような一般名詞になるようなタイトルが理想」

また橋本五郎先生から

「推理小説を読むのに、タイトルで犯人がわかっちゃう」

といわれたときは、まさにその通りと納得してしまったほどでした。

ネットに情報があふれる時代、自分自身も読むか読まないかはタイトルを見て決めるくらいなのに、なんて安易なつけかたをしてしまったんだろうと反省しつつ、また勉強になりまし

た。最初にネタバラシをしてしまう手法もありますが、エッセイには必要ありません。

貴重かつためになる選評をいただき感謝してもしきれません。これからも書く楽しさを味わいつつ、秋田の観光パンフレットに採用してもらえるようなタイトルを考え、また来年チャレンジします。

選

評

生ま身の人間を描いて

内館牧子

最終選考作品を読み、小説もエッセイも、ある程度の自信を持っている人の計9編が残ったと思った。

読んでいると、小説もエッセイも書き手が面白がって、グングン書き進めている感じが伝わってくる。それは作品の力になっているし、読み手をとらえる。

小説には色々なジャンルがある。純文学とエンターテイメントでは違う。私自身はもともとテレビドラマの脚本家であり、万人が理解でき、共感も反感も含めて心に引っかかるエンターテイメントを書きたいと願ってきた。

テレビドラマの作劇方法が、そんなジャンルの小説を書く上で、非常に役立っている。

何よりも、登場人物を細かく作りあげること。例えば、なぜ二人は別れたのか。なぜこの行

動に出たのか、なぜ決断したのか等々。そして、その考え方は何に影響されているのか。家族なのか教師なのか何かのできごとなのか等々。自分が演じる役に生ま身の人物が感じられないと、俳優は出演しない。表立っていなくても、行間に人間の心理が見えることは重要だ。

〈小説の部〉であるが、「星空に、へばな」全選考委員のフルマークで文学賞を得た。ただ、各委員から問題も提起されていて、私は1ページ目の「秋田にはよ、宇宙一ウマいうどんが食える場所があンだ」で、すぐに自販機のうどんだなとわかった。秋田の自販機うどんはテレビ、雑誌でもさんざん取りあげられ、知られている。これで引っぱるのは無理。また、他の委員からはうどんは一回でいいとか、秋田を全部入れることはないとか、この程度のミステリーでは肩すかしだという声もあった。

佳作の「男鹿の花嫁」は、若年性認知症の妻の状況描写に終始していると思った。現在、一般人でもネットなどで医療情報が得られるし、もっとその状況に置かれた人間の心理を描いて欲しかった。

「遠くの夫」は友人の夫の死と、自分の父親の死を書いているのだが、その間に、米やガッコの話、こんにゃくやガラスープの話などが入り、死者を忘れそうになる。死者と食べ物の話

が分断している印象を受けた。構成をもっと練る必要がある。

「杉の香は鈴の音に乗って」、タイトルがまずい。ありきたりな言葉で説明しているに過ぎない。登場人物は母も娘も、私にはよく理解できなかった。もしもこれが映画やテレビドラマ、舞台になる場合、俳優を納得させられるか、難しい。もっと人物を深めるとずい分変わる。来年も応募してほしい人だという声が、選考会であがった。

「どうやら今は、狂い直しの時」の谷門さんは面白いものを書く方だが、今回のラストはできすぎの予定調和。せっかくうまく伏線を張っていたのにと残念だった。いい心理描写が随所にあり、「負担の大きさは、容量を越えてくると、憎悪になってくる」などはうなった。

〈エッセイ・紀行文の部〉は選考委員で話を重ねたが、今回は佳作一編のみということになった。

その一編は「秋田美人は背中美人」である。文章のリズムも構成もよく、ユーモラスで飽きさせない。ただ、タイトルで背中美人の話だなとバレる。文中に色々といい言葉があるのに、安易な説明タイトルになった。

「郷土の食に包まれて」は、発酵食品の話とサミットの話とで二分割され、融け合わない。

小説の「遠くの夫」と同様にパラレルである。もっとうまく二つが融合できれば、前半の四季も印象的に書けただろう。タイトルはありきたり。

「戯雨」は評価が割れたが、私は雰囲気があって静かないい作品になっていると思う。母親がいかにいいかという思いも、行間によく出ている。だが、生ま身の人間は伝わりにくい。小説を書いてみると、きっと見えてくることがある。来年はぜひ小説で応募してほしい。

「プソイドハイマート」は、生まれ故郷ではないのに故郷だという心理に着目したのが面白い。だが、今ひとつ心に引っかからない。面白いテーマなので、そこにからめて人間の心理をもっと読みたかった。

皆様にぜひお伝えしたいのは、物語を先に作るのではなく、まず登場する人間の状況、心理を作ることです。

〈脚本家　秋田市出身〉

最後の仕上げを

塩野米松

小説の部

「ふるさと秋田文学賞」は、文句なしで、牧野恒紀（こうき）さんの『星空に、へばな』です。インディー団体のプロレスラーの父親が死んだ。48歳だった。英雄的な死でも悲劇でもない。よくある不運な交通事故だった。その葬儀に行った23歳の娘は父親と同じ金髪、二輪車の整備士をやっている。名前が「みやか」。漢字で書くと「雅香」。「がっこ」だ。付けたのは父。離婚してしまったが元妻もやってくる。愛煙家の看護師だ。父親の遺品の１２５ｃｃのバイクに二人乗りで、父のふるさとの秋田に向かう。目的は父が言っていた「宇宙一ウマいうどんを食べるため」。そのうどんは数少なくなった自動販売機のもの。軽妙だが、情のある会話

や、登場者の配置には余裕を感じます。秋田行きには隠された秘密も。

なかなかこんな設定はできません。見事な作品です。自分の母を「離婚後は他人同然だったのに、当たり前のように喪主を務めていた」とか父の死を「人生のスリーカウント」とか気の利いた1行が頬を緩ませる。タイトルの「へばな」は秋田県人にはお馴染みの「またね」のこと。

「佳作」は、中村均（ひとし）さんの「男鹿の花嫁」。こちらは若年性アルツハイマー型認知症と診断された妻（61歳）を連れて、自分たちが結婚のきっかけになった男鹿半島への旅する話です。2、3年後には退職をと決めていた夫は、会社を辞め、妻の病気の進行を少しでも遅くしようとしていた。東京にいる息子の「思い出の場所とか二人でめぐってくれば」というすすめもあって、自分がプロポーズした記念の場所、入道崎に旅に出る。日常の仕事や作業を思い出せなくなったり、昔の映画を懐かしんだりする起伏の激しい妻の症状を織り込みながら、二人の小旅行が描かれていく。

この2作は、最終選考に残った「遠くの夫」「杉の香は鈴の音に乗って」「どうやら今は、狂い直しの時」よりかなり優れていました。

たまたま授賞の2作は似たコースを旅する物語でした。映画でいうロードムービーです。こうした作品を読む読者は、主人公達が辿ったコースを丁寧に追うものです。多くの読者が秋田県の人かそれに近い人達です。彼らは物語の道順や風景や事情に通じています。それ故に書き手は詳細な調査が必要です。些細なほころびや疑問が作品の価値を損なう事になります。ふるさと秋田文学賞の応募作品には、案内記や観光情報を鵜呑みにしたものが多いのです。こうした旅ものには安易に引用せず、実際に現場に足を運ぶことをすすめます。場所や風景、出会った人や物には作品を活かす「詳細」があるものです。

エッセイ・紀行文の部

応募作品は72点と多かったのですが、最終選考に残ったのは4点のみ。そのなかに紀行文はありませんでした。残念。そしてエッセイもこれはという作品がなく、昨年に続き「ふるさと秋田文学賞」に該当するものはありませんでした。

そのなかで佳作に推されたのは、榎木由紀子さんの「秋田美人は背中美人」。よく言われる

「秋田美人」の誕生の秘密を探ったもの。帰郷し、祖母や母の背中を流してあげて「お気楽」と「背中美人」に故があると気づいたことを、気負わずにつづった作品です。

生活や日常での気づき、観察がエッセイの大事なネタになります。更なる作品の応募を待っています。

両部門にいえることですが、できあがったら、しばらく寝かせて、最後の仕上げに取り組んでください。設定の狂いや、言葉遣い、わかりづらさなどに気づくものです。最後の手入れ、読み返しが作品を美しく仕上げるのです。

〈作家　仙北市（旧角館町）出身〉

切なさあり、ユーモアあり

橋本五郎

「ふるさと秋田文学賞」の選考委員をお引き受けするにあたって、私なりの選考基準を考えてみた。私は小説の専門家ではない。簡潔に事実を伝える新聞記者である。小説とはまったく逆に、文章を縮めるのが商売である。ならば、小説論としてよりも読者としておもしろいかどうかで判断しよう。「ふるさと文学」とは何か。山や川といった自然があり、方言という言葉があり、何よりも母の懐に抱かれるような「郷愁」が匂っていればいいのではないか。そんな風に思いながら審査に臨んだのであった。

したがって私の審査眼は限りなく甘くなる。タイトルの拙劣さ、細部の記述の危うさ、構成の幼さなどをめぐる内館牧子、塩野米松両先生の厳しい批評を聞きながら、われながら、定見のなさを悔いてしまった。しかし、もう遅い。甘さいっぱいでいくしかない。そう覚悟を決め

ることにした。

私の甘さからすると、それぞれが私の期待した要素が入っていておもしろかった。「星空に、へばな」は、「自販機のうどん」や「秋田に来て、とうに分かっていた。この土地の、人の優しさや温かさが、かき揚げよりもずっと美味しいトッピングであることを」の表現に、なにやら秋田向けの「おもねり」を感ずる人がいるかもしれない。それでも私には、この作品には快いユーモアがあるのをまず評価する。ゴム長ジイちゃんが「あどな、と機密をもらすスパイみたいに声をひそめる」などの表現にもそれが見える。何よりも父親への名状しがたい気持ちが出ている。

故郷に錦を飾りたい。そのために手を伸ばすのに、何一つつかめず、苦難に抑え込まれそうになる。それでもカウントツーで立ち上がる——。

当時の彼は、こんな状況だったのでは。今になって思うのだ。

笑う人もいるかも。でも、あたしは笑わない。

小説に限らない。新聞のコラムでもそうだ。最大の敵は「陳腐さ」である。「男鹿の花嫁」の次の表現はいかにも陳腐という見方もあろう。

なぜ陽が沈むというたったそれだけのことが、人を切ない気持ちにさせたり、感動させたり、そして誰かに何かを決意させるのだろう。

私もそう思う。もっと表現に工夫があっていいという希望はある。しかし、次の「結婚してください」につなげるためには必要だったのだろうとも思う。

「結婚してください」

しばしの間があって、奈津子の唇が動いた。私は彼女の言葉を強く、強く抱きしめた。

「言葉を抱きしめる」に?も付こう。が、私などは「切ないなあ」と素直に思うのだった。

それぞれ好みはあろうが、私の実感としても秋田に美人が多いのは確かだ。それがなぜなの

か。「秋田美人は背中美人」で新説が登場した。

秋田美人といわれる秋田女の本当の理由はこの「なんとかなっぺ」からの他力本願、いや、おおらかさから人生が豊かになり、笑顔につながり、肌に現れ、そして太陽が届かない背中に現れるのではなかろうか。

この説明には最近はやりの言葉で言えば、ほとんどエビデンス（根拠）がない。が、私にとっては、なかなかの新説だった。

〈読売新聞特別編集委員　三種町（旧・琴丘町）出身〉

一次選考委員　寄稿

モノを書く人の読書

柴山芳隆

「ふるさと秋田文学賞」の応募作を読んでいると、長くても疲れない作品もあるし、短くても疲れる作品もある。疲れる・疲れないは、文章力との関連で、作品全体の評価につながる可能性もあるから疎(おろそ)かにはできない。

読み手が疲れる作品は、内容に由来する場合が多いが、作者が読者の存在をまるで念頭に置いていないように見えるケースもある。むろん、文芸作品というのは作者が自分の書きたいことを自分の書きたいように綴っていくのが基本で、それはそれで何の問題もない。ただ、誰かに読んでもらうことが前提になっている文章では、やはり、読者に余計な負担を与えないようにという配慮は必要であろう。これは、読者に阿(おもね)るという意味ではもちろんない。

どんなコンクールでも、応募作が一応出来上がると誰でも、応募期限の許す範囲内ですぐに推敲や校正に取り組むに違いない。しかし、自分の作品を客観的に読むというのは慮外に難しいもので、ついつい御座なりになったり甘くなったりしがちなものである。自作を、他人が書いた作品のように心を込めてきちんと読むことが大事で、そこには第三者的な批評精神が含まれていなければならない。

小説やエッセイは、内容（主題と素材）・構成・表現・表記の四つの観点から総合的に評価されるのが普通である。このうちの「表記」は最初に読者の目に触れるもので、その分、読者の初発の感想に影響を与える度合いが大きいから細心の注意を要する。

優れた文芸評論家であった亀井勝一郎はその著『読書論』の中で、「現代で、古典から現代著作家や新聞記事まで読むためには、およそ七種類の日本語を知っていなければならない。従来の漢字、旧かなづかい、当用漢字、新かなづかい、英語、あるいは日本語化した英語、それから俗語と、現代使用している言葉はこの七種類から成り立っている。」と指摘している。傾聴すべきであろう。

小説であれエッセイであれ、モノを書くというのはとりもなおさず自分を消費するというこ

とである。消費した分を不断に補っていないとどんどん痩せ細って、いくらもしないうちに何も書けなくなってしまう。そうした事態に陥らないようにするためには絶えずエネルギーを補充し続けなければならないが、もっとも効果的な手段は読書である。いや、それ以外にないと断言してよいかもしれない。

日常生活において、人は体力や健康を維持するために食事を欠かすことができず、それも栄養のバランスを考えながらでないと十全な食事とはならない。モノを書くためのエネルギーを確保する場合の読書もこれに似ている。つまり、まずはさまざまなジャンルの著作物に満遍なく接していることが必要である。そうしたなかで、自分の嗜好や資質に応じて特に深入りしたくなる分野がおのずからにして見えてくるので、その段階に到ったら、その部分を集中的に究めていくようにするとよいであろう。

毎日の食事でよしとされる〝腹八分〟は読書に関しては必ずしも当てはまらない。食べ過ぎは胃腸をこわすが、読書をし過ぎて病気になったという話は聞いたことがない。それどころか、読書の世界では場合によって極端な〝偏食〟も必要になってくる。そこは臨機応変にということになる。

古今東西の優れた作家の読書量は膨大そのものであるし、その作家がこれと定めた分野の探究の深さは瞠目以外のなにものでもない。広く深く、これが、モノを書く人の読書の鉄則ではなかろうか。平凡なことだがいざ実行していくとなるとなかなか容易ではない。しかし、それを地道に実践していかないかぎり、それ相当の高みには到達できないと自戒し、忘れないようにしたいものである。

〈作家　秋田市在住〉

秋田県の読書活動推進施策

～県民運動の視点で読書活動を推進～

秋田県では、全国に先駆けて読書条例［秋田県民の読書活動の推進に関する条例（平成２２年４月１日施行）］を制定し、また毎年１１月１日を「県民読書の日」と定めています。

「第３次秋田県読書活動推進基本計画」（令和３年度から７年度まで）に基づき、「生涯にわたって読書に親しみ、心豊かに」という基本目標のもと、県民がライフステージに応じて読書に親しむ活動を推進しています。

©2015 秋田県んだッチ

《読書活動推進体制》

●秋田県読書活動推進基本計画の進行管理

秋田県読書活動推進本部《知事を本部長とし、各部局長で構成》

●施策の一体的推進

秋田県読書活動推進連絡会
《庁内関係１２課・所で構成》

文化振興課　次世代・女性活躍支援課
長寿社会課　障害福祉課
教育庁総務課　幼保推進課　義務教育課
高校教育課　特別支援教育課
生涯学習課　県立図書館
生涯学習センター

●市町村との協働による推進

秋田県読書活動推進連絡協議会
《県と２５市町村で構成》

市町村企画担当課
市町村教育委員会読書活動推進担当課

文化振興課
教育庁総務課　　生涯学習課

≪令和５年度　県の読書活動推進の取組例≫

○読書啓発イベントの開催

１１月１日「県民読書の日」にちなんだイベントとして、１１月５日（日）秋田キャッスルホテル（秋田市）において、「読書の杜トークライブ」を開催し、約３６０名が参加しました。

第１部「第１０回ふるさと秋田文学賞」表彰式では、受賞者３名の表彰のあと、選考委員の内館牧子さん、塩野米松さん、橋本五郎さんの講評をお聞きいただきました。

第２部「読書の杜トークライブ」では、社会学者の古市憲寿さんと秋田市出身でフリーアナウンサーの堀井美香さんを迎え、古市さんは本の読み方や子どもの頃に読んでいた本などについて、堀井さんは局アナ時代の本にまつわるエピソードや小説の朗読を通じて感じることなどについて語りました。

参加者からは、

・受賞作を読むのが待ち遠しい思いです。今回、初の参加であり、１０回を重ねるイベントと知りましたが、アーカイブも含めて味わってみたいものです。

・選考委員の講評で、読者に対する考えが聞けてとてもよかった。読むことだけで書くことはないが、講評を伺って書くときに何を大切にしていくのかを知ることができた。

・トークライブでは、本との向き合い方や出会いについて楽しく学べました。

・本を読みたくなり、本を書いてみたくなるイベントでした。

等の感想が寄せられました。

○読んだッチ・リレー文庫

子ども達の読書環境を充実させるため、家庭で読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、希望する保育所等に贈って子ども達に読書の楽しさをリレーする取組です。

平成２３年度から令和４年度までの１２年間で１,２０２名の方々から寄贈があり、９０９か所の施設に届けられ、子ども達に楽しんでもらっています。

保育所、幼稚園、放課後児童クラブ、公民館、体育館、病院、店舗等、子ども達が集まる県内の施設ならどこでも設置できます。

随時受付していますので、ぜひご利用ください。

読んだッチ・リレー文庫（例）

○「あきたブックネット」による情報発信

特設ページ「あきたブックネット」

県公式ウェブサイト「美の国あきたネット」内の特設ページ「あきたブックネット」で著名人がおすすめする本の紹介やこれまでの県の取組など、読書が身近になる情報を発信しています。

また、X（旧Twitter）では、読書に関して特徴ある活動をしている人物や巷で話題の本など、県内外の読書や秋田に関する新しい情報を随時提供していますので、ご覧ください。

～読書に関する情報を発信しています～

○「あきたブックネット」（「美の国あきたネット」内）

https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/31730

○これまでのふるさと秋田文学賞　受賞作品

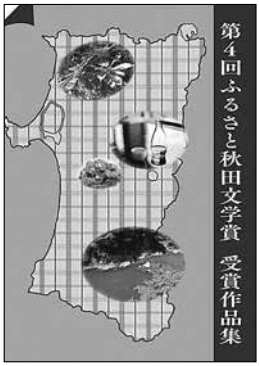
第９回（令和４年度）
＜小説の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「クリームシチュー」　　青山　トーゴ
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「浮遊する水」　　山本　郁人
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「千束立つ日陰の月花」　　山本　愛海
＜エッセイ・紀行文の部＞
　ふるさと秋田文学賞　　該当作なし
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「方程式のない斑紋」　　石山　敦子

第８回（令和３年度）
＜小説の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「山椒と虹」　　渡部　麻実
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「停戦旅行」　　畠山　政文
＜エッセイ・紀行文の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「大地と共に我ら生き」　　石原　敏子
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「廃屋の月～矢口高雄さんを偲んで～」
　　工藤　幸

第７回（令和２年度）
＜小説の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「赦し」　　常田　あさこ
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「近かったり遠かったりするもの」
　　青山　トーゴ
＜随筆・紀行文の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「蚕のなぐさめ」　　春野　昌和
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「消えゆく集落の記」　　鹿住　敏子

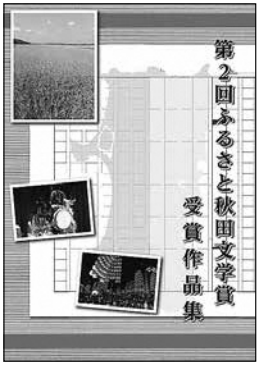
第６回（令和元年度）
＜小説の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「BASEBALL CLOUD」　上月　文青
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「颯爽と雪解け道」　片桐　健文
＜随筆・紀行文の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「遊びにおいでよ」　えばた　えり
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「三度目の成人式」　那須　厚

第５回（平成３０年度）
＜小説の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「ことねとあまね」　渡部　麻実
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「入道崎恋歌」　畠山　政文
＜随筆・紀行文の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「神代駅から」　渡辺　礼司
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「夢のあと」　堀川　茂進



第４回（平成２９年度）
＜小説の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「ヘミングウェイに聞いてみて」
　　夢野　寧子
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「みずのたたき、てふてふの花」
　　渡部　麻実
＜随筆・紀行文の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「譲り葉」　青山　トーゴ
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「「生きる」 父の愛した映画」
　　鹿住　敏子

第３回（平成２８年度）
＜小説の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「たちきる」　岩井　圭吾
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「直武、りんどうの恋」　森川　瑠美子
＜随筆・紀行文の部＞
　ふるさと秋田文学賞
　「山男と夫の贈物」　石原　敏子
　ふるさと秋田文学賞佳作
　「こまちの旅」　遠藤　美弥子



第２回（平成２７年度）
　最優秀賞
　　随筆「横手盆地で農を継ぐ」
　　鈴木　利良
　優秀賞
　　小説「みちのく鬼譚（きたん）」　森川　瑠美子
　優秀賞
　　小説「いつか、夏が終わる前に」
　　渡部　麻実

第１回（平成２６年度）
　最優秀賞
　　小説「竿燈万華鏡」　児玉　ヒサト
　優秀賞
　　小説「焼畑の子」　山北　登

～過去の受賞作品（PDF形式）はこちらから～
○「あきたブックネット」（「美の国あきたネット」内）
https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/21547

作品募集要項・実施状況

第10回ふるさと秋田文学賞　作品募集要項

●募集作品

○テーマ　秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・文化・風土・人物・物産などを題材とします。

○部門　「小説の部」　…A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内
「エッセイ・紀行文の部」…A4判の400字詰め原稿用紙10枚以内

ご注意
送付部数は
4部(コピー可)

●応募資格

年齢・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

●作品募集期間

令和５年４月３日（月）から令和５年７月31日（月）まで
※郵送（当日消印有効）または持参（平日午前９時～午後５時）してください。

●賞

小説の部	ふるさと秋田文学賞　…１編(正賞/賞状　副賞/賞金50万円) ふるさと秋田文学賞(佳作)…１編(正賞/賞状　副賞/賞金５万円)
エッセイ･紀行文の部	ふるさと秋田文学賞　…１編(正賞/賞状　副賞/賞金20万円) ふるさと秋田文学賞(佳作)…１編(正賞/賞状　副賞/賞金２万円)

※入賞者には、後日、受賞作品集を贈呈します。

●選考委員

１次選考委員　柴山　芳隆　氏　（作家　秋田市在住）

最終選考委員　内館　牧子　氏　（脚本家　秋田市出身）
塩野　米松　氏　（作家　仙北市：旧角館町出身）
橋本　五郎　氏　（読売新聞特別編集委員　三種町：旧琴丘町出身）　（五十音順）

●応募規定

○原稿
・原稿は縦書きとし、電子データでの応募は不可とします。　（ワープロ原稿はA4判横長の白紙に30字×40行の縦書きで印字し、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記）
・日本語で書かれた自作未発表のものとします。

○表紙
・応募作品には次の事項を明記した表紙をつけてください。
①応募部門、②題名（ふりがな）、③原稿用紙換算枚数、④氏名（ふりがな）、ペンネーム（使用する場合のみ）、⑤郵便番号、⑥住所、⑦電話番号、⑧年齢、⑨性別、⑩職業（学生の場合は学校名）、⑪引用または参考にした資料・文献、⑫募集を知ったきっかけ（過去に応募、リーフレット、公募ガイド、新聞、ウェブサイト名等）

○あらすじ
・【小説の部】は、200字程度にまとめた「あらすじ」を表紙の次のページに添付してください。

○応募部数
・作品は４部お送りください。（コピー原稿可。必ず通しページ番号をつけ、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩をクリップ等で綴じること）。

○その他
・表紙、ワープロ原稿の様式は、ウェブサイト「美の国あきたネット」でダウンロードすることができます。
・〈表紙〉に記入された個人情報は、本文学賞に関するもの以外には使用しません。
・応募作品は一切返却しませんので、あらかじめご了承ください。
・各部門一人１編に限り、同一部門への二重投稿は失格となります。
・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。（ただし、主催者は著作者本人の意向を尊重し、作品を広められるよう配慮するものとします。）

●選考結果の発表

・令和５年10月中旬、入賞者に直接通知するとともに、ウェブサイトに掲載します。
・表彰式は、令和５年10月下旬～11月上旬に開催予定の読書活動啓発イベント（秋田市で開催）で行います。

●応募・問合せ先

秋田県観光文化スポーツ部　文化振興課　読書活動・文化芸術推進チーム
「ふるさと秋田文学賞」担当
〒010-8572　秋田県秋田市山王三丁目１番１号
電話　018-860-1530 ＜平日：午前９時～午後５時＞

第10回ふるさと秋田文学賞の実施状況

1　応募状況等

・応募総数１４１

［内訳］小説の部６９、エッセイ・紀行文の部７２

（県内４５、県外９５、国外１）

2　最終選考候補作品　※応募順

○小説の部（５作品）

「遠くの夫」　まど　りんこ（東京都品川区）

「どうやら今は、狂い直しの時」　谷門　展法（千葉県柏市）

「男鹿の花嫁」　中村　均（岩手県滝沢市）

「杉の香は鈴の音に乗って」　松田　貞子（三重県津市）

「星空に、へばな」　牧野　恒紀（東京都杉並区）

○エッセイ・紀行文の部（４作品）

「秋田美人は背中美人」　榎木　由紀子（大阪府枚方市）

「郷土の食に包まれて」　笹　リン（神奈川県相模原市）

「戯雨（そばえあめ）」　堀川　茂進（秋田県湯沢市）

「プソイドハイマート」　ルスターホルツ友里（兵庫県神戸市）

3　受賞作品

○小説の部

＜ふるさと秋田文学賞＞

「星空に、へばな」　牧野　恒紀

＜ふるさと秋田文学賞佳作＞

「男鹿の花嫁」　中村　均

○エッセイ・紀行文の部

＜ふるさと秋田文学賞＞

該当作なし

＜ふるさと秋田文学賞佳作＞

「秋田美人は背中美人」　榎木　由紀子

第10回ふるさと秋田文学賞応募者内訳一覧

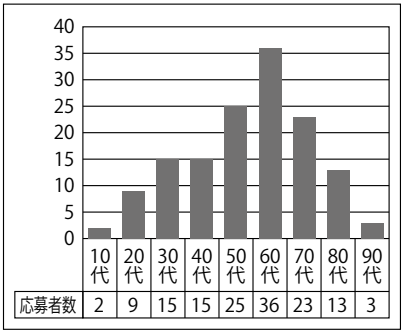
部門別応募数（編）

小説	69
エッセイ・紀行文	72
計	141

男女別応募者数（人）

男	84
女	57
計	141

年代別応募者数（人）



都道府県別応募者数（人）

県内		45
県外		95
県外内訳	北海道	2
	青森県	0
	岩手県	6
	宮城県	6
	山形県	1
	福島県	0
	茨城県	0
	栃木県	2
	群馬県	0
	埼玉県	5
	千葉県	5
	東京都	25
	神奈川県	10
	新潟県	2
	富山県	0
	石川県	0
	福井県	1
	山梨県	0
	長野県	0
	岐阜県	3
	静岡県	3
	愛知県	4
	三重県	1
	滋賀県	1
	京都府	2
	大阪府	8
	兵庫県	2
	奈良県	0
	和歌山県	0
	鳥取県	0
	島根県	0
	岡山県	0
	広島県	0
	山口県	0
	徳島県	0
	香川県	0
	愛媛県	0
	高知県	0
	福岡県	3
	佐賀県	2
	長崎県	0
	熊本県	0
	大分県	1
	宮崎県	0
	鹿児島県	0
	沖縄県	0
国外（アメリカ合衆国）		1
計		141

第10回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日　令和六年二月十五日

発　行　秋田県

編　集　秋田県観光文化スポーツ部文化振興課

電話　〇一八（八六〇）一五三〇

表紙

秋田県男鹿市　鵜ノ崎海岸

2 秋田県